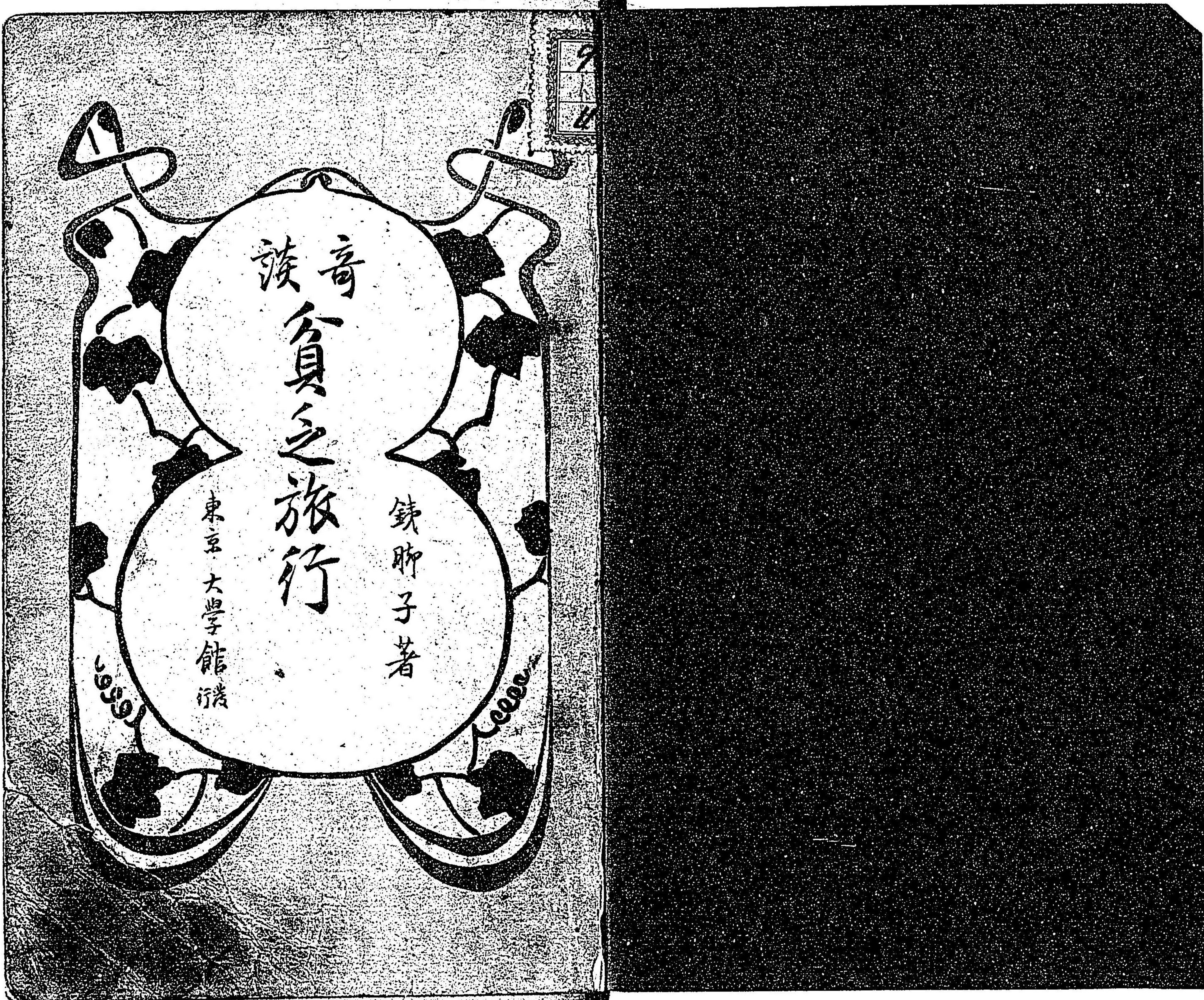


2
4

音
讀
貧
乏
之
旅
行

鉄脚子著

東京大學館
行發



96-43

はしがき

鐵脚子先きに

野宿旅行なるものを著はし、今

又茲に不可思

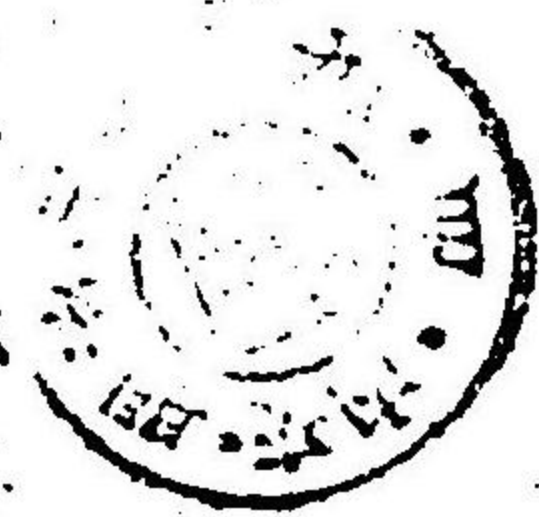
議なる小冊子を公にせんとする

も、固より之を以つて世に裨益する所あらう

とは思はぬ、が、旅行は鐵脚子の持病で見れ

ば、その之に就ての經驗と閱歷とを讀者の眼

に晒らすならば、旅行に就ての趣味だけは確



かに解し得られやうと思ふ、意のある所はた
之れで。

著 者

目 次

(一) 次 目

一 貧乏旅行……………	一頁
二 上信旅行、出立、旅費、子供と喧嘩、敗北、山中の一人旅、碓氷の險道、輕井澤の氣候……………	四
三 旅人宿のお斷り、茶店のお厄介、若者の談話、木賃宿……………	一五
四 朝ッばらの酒、規約蹂躪、馬上の得意、落馬の失敗、旅人宿のお斷り知遇の旅人宿、女中の談話……………	二八
五 雨中の旅行、茶店の休息、我が黨の旅行家、談話、意氣投合、道連れ、快談壯語、信州蕎麥、旅人宿の冷遇、警察へ馴け込み、巡査の紹介、傍若無人、痛飲壯語、復讐の相談、瘦せ我慢の馬食、満腹の苦痛……………	四八
六 炎天の苦痛、山川の風景、川原の晝寢、茶店の休息、道連れの別れ……………	五八

七 別盃、離別、酔歩の緩慢、疲勞と空腹、夜道、友人訪問、別後の痛飲 七四
奥羽旅行、大枚の旅費、出立の期節、猪苗代湖畔、茶店の休息、談話
女と道連れ、苦勞話、投宿、女のお蔭、熱海の温泉、隣室の談話、竊
み聞き、駆け落者……………九三

八 出立、茶店の休息、偶然の邂逅、駆け落ち者と道連れ、異様の四人旅
馴染のお別れ、駆け落ち者のおつき合ひ、茶店の痛飲、相手の氣焔、
女の心配、飛んだ散財、酔つ拂ひの閉口、停車場の見送り、へんなお
別れ……………一三三

九 爺さんと合宿、爺さんの因果話……………一三三

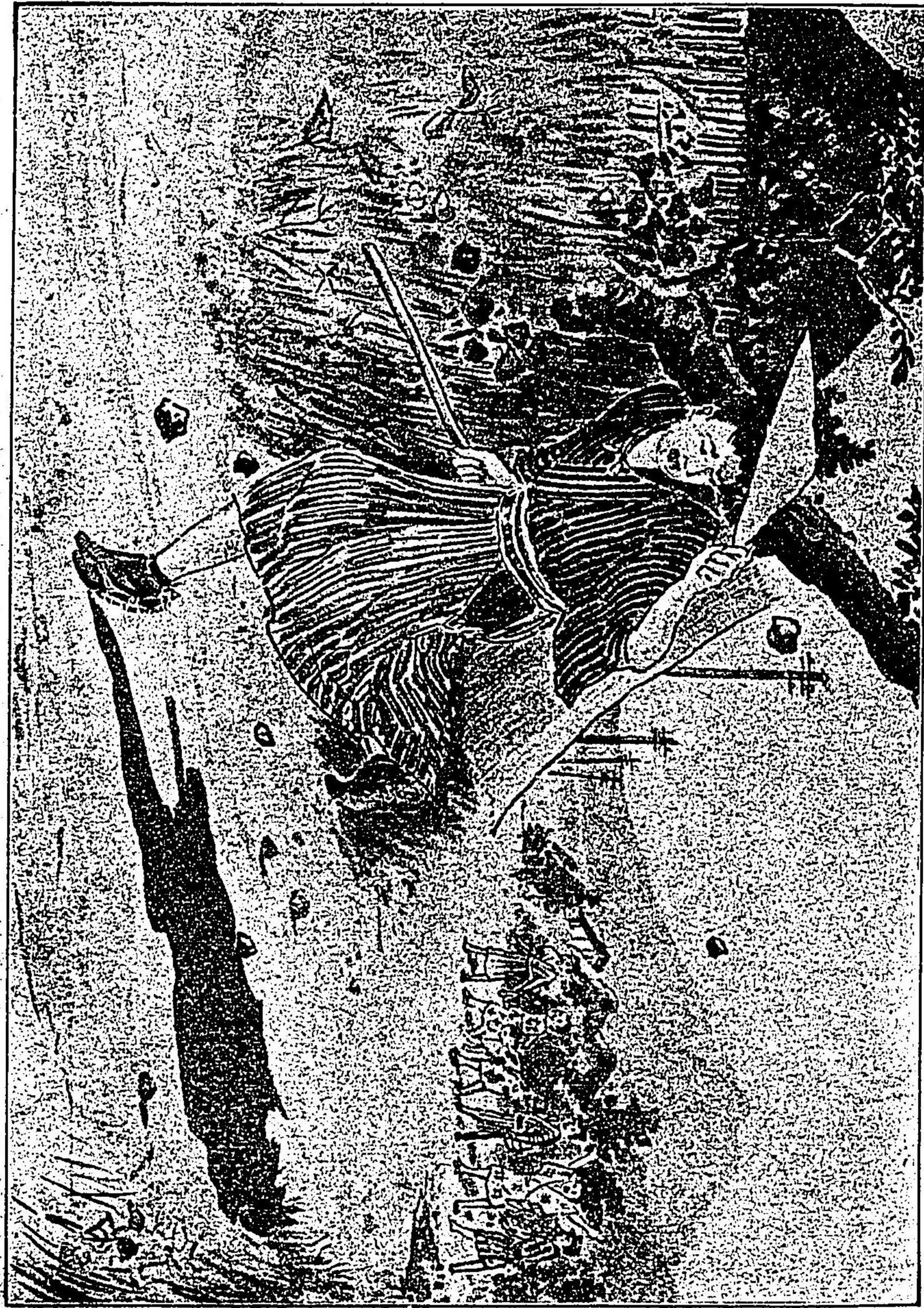
十 早朝の出立、秋の朝景色、温泉場の變遷、へんな道連れ、駈落者の詮
索、駈落者の身の上……………一四一

十一 同宿、飛んだ御馳走、二度の身の上話……………一五三

十二 連れの別れ、米澤越え、山中の寂寥、坊主と道連れ、不思議な坊主

坊主の案内、山村の寒寺、休息、悠々の閑日月、碁合戦、寺の御馳走
痛飲壯語、お寺の御厄介……………一六二

十三 二日の逗留、お暇、友人訪問、別後の祝盃、滞在、別杯、饞別、雪
中旅行、吹雪の困難、雪の山道、旅費の缺乏、船の失敗、失望落膽、
雪の夜道、嶮道の夜行、友人訪問……………一八二



新版旅行書目

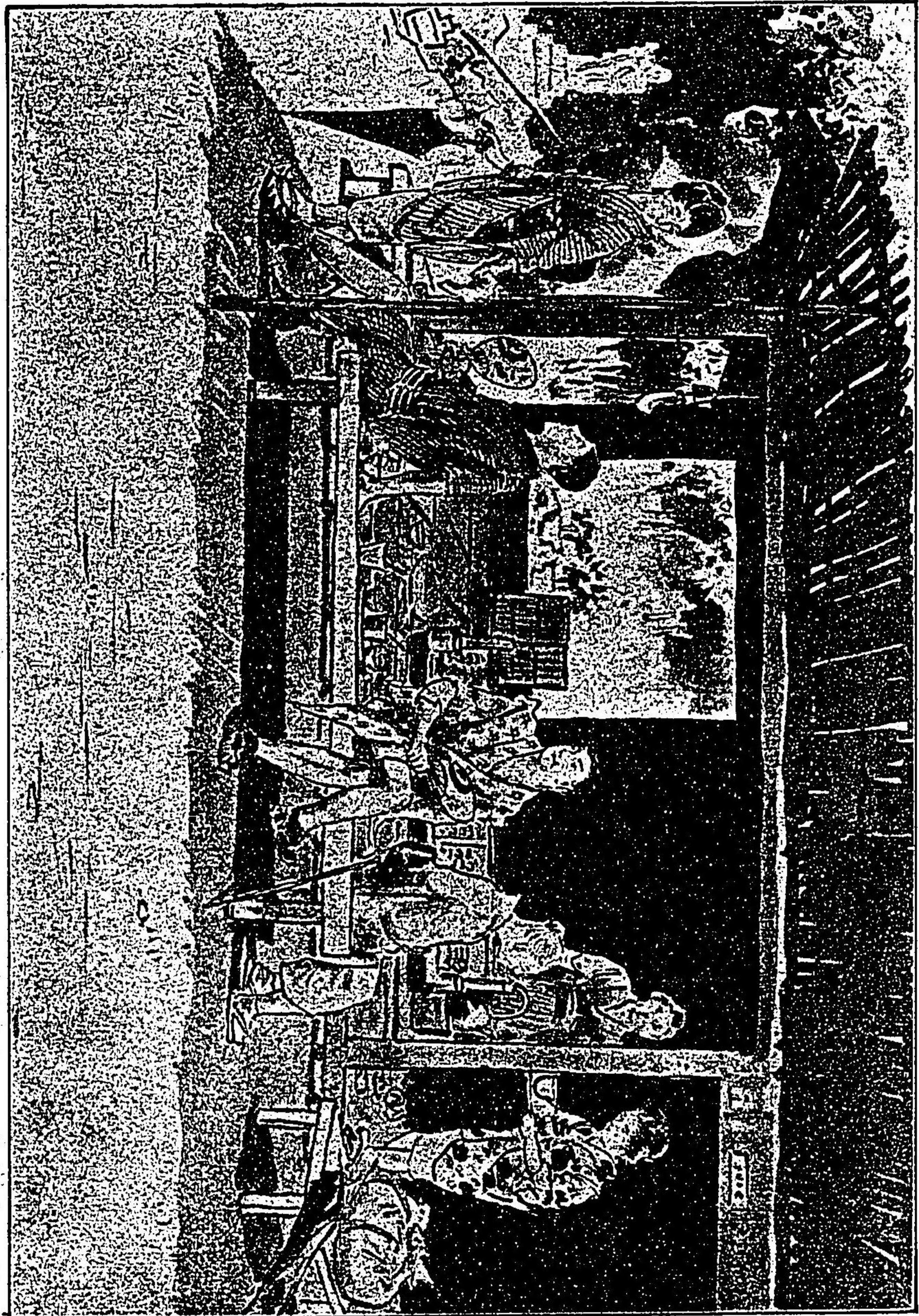
宮崎來城著	無錢旅行(八版)	正價二十五錢 郵稅四錢
宮崎來城著	乞食旅行(五版)	全上
鐵脚子著	野宿旅行	全上
鐵脚子著	貧乏旅行	全上
押川春浪著	奇人の旅行	全上
村上濁浪著	冒險旅行術	全上
早田玄洞著	鍊膽夜間遠足	正價二十錢 郵稅四錢

大學館發兌

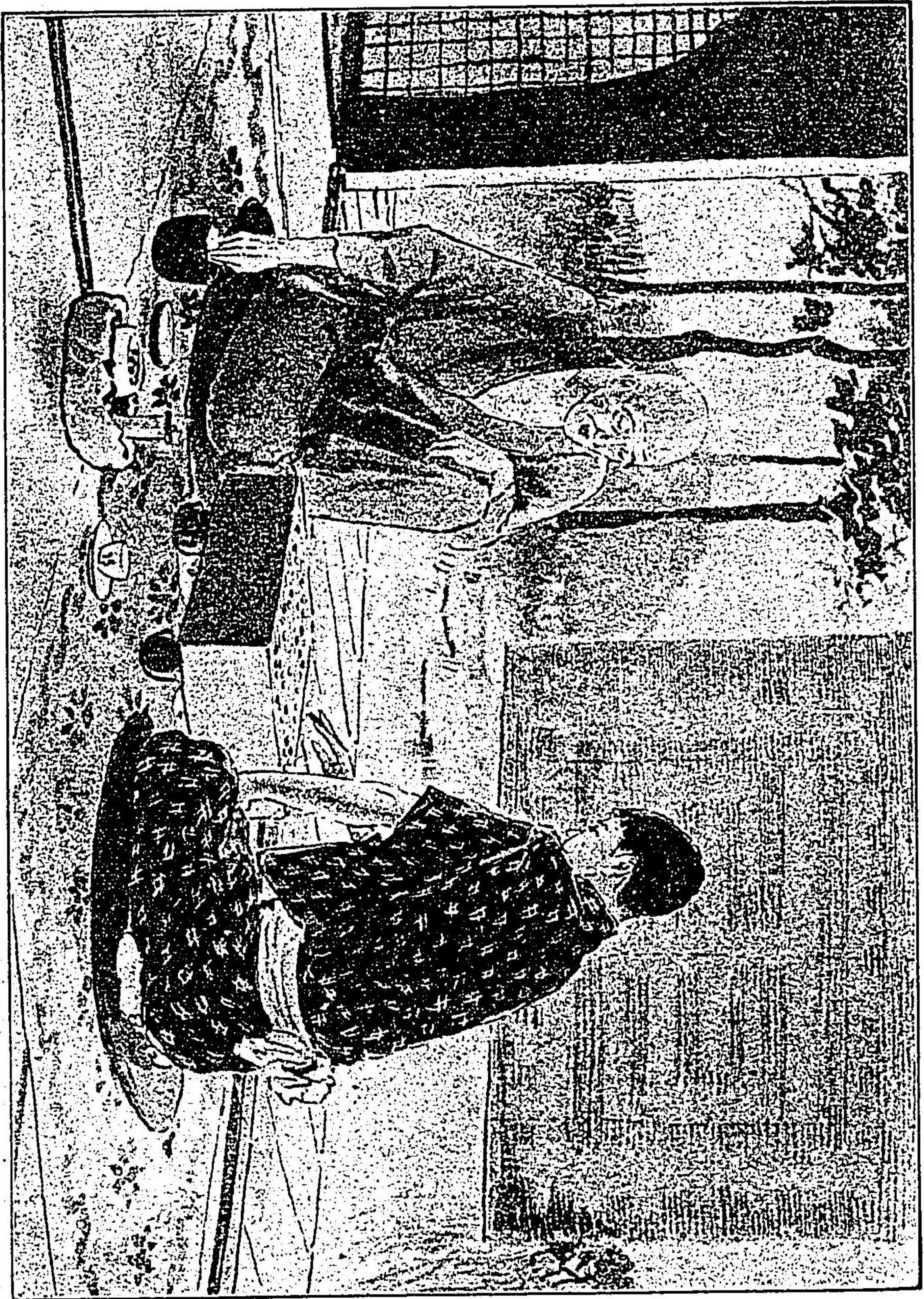
行旅記



二 行 旅 乏 食



三 行 旅 乏 資



四 行 旅 乏 食

談奇 貧乏旅行

一 貧乏旅行

鐵 脚 子 著

鐵脚子先に、野宿旅行なるものを著し、今又茲に不可思議なる小冊子をものしたが、之は前の野宿旅行の續編として見て貰へば差支はない、と言つては全然野宿旅行ではない、野宿旅行もあれば贅澤旅行もあり、乞食的旅行もあれば滑稽的旅行もある、それに、春期旅行もあれば夏季旅行もあり、秋季旅行もあれば又冬期旅行もある、その複雑にして種々なるは、單に野宿旅行に限られたるものゝごとき比ではない、之れこの小冊子の野宿旅行と聊か趣を異にする所以である。

旅行に就ての主義と本領とは、既に野宿旅行に於て言つたごとくで、今茲に再び繰り

返すの必要はないのである、が、その目的に就ては、この小冊子の野宿旅行と多少の趣を異にするがごとく、その目的に就ても又自から異ならねばならぬ、野宿旅行は單に野宿を以つて専門としたのだが、この行は固より野宿を以つて専門としたのではない、言はゞ、懐中寂しき時は野宿も、懐中暖かなる時は柄にもない贅澤旅行と洒落たこともあるので、つまり懐中次第の旅行と思へば差支はないのである。が、元來貧乏に生れた鐵脚子に、固より懐中の暖かなる筈のあらうことなく、偶々風の吹き廻しで、時には懐中の暖かなることもないではないが、如此きことは殆んど稀で、他は皆年が年中文なしに送つて居るのである、境遇が既に如此だから、旅行を以つて仕事のやうにして居る鐵脚子も、その旅行たる固より文なし旅行である、既にその旅行が多く文なしであれば、野宿旅行や乞食的旅行たるは又固より言を俟たないのである、で、この行のごときも、好しその主眼とする所が野宿旅行でないにもせよ、その行ふ所が往々野宿旅行で又乞食的旅行である。

更らに一言せねばならぬ、抑々この行たる、敢て場所を撰んだ譯でもなく、時日を限つた譯でもなく、期節を定めた譯でもない、意の向くあれば動き、意の向かざれば止まり、雲のごとく風のごとく、漂々として定めなきが鐵脚子の持病で又キャラクターである、故にこの篇に收むる所のものゝ如きは、或は奥州旅行もあれば、信州旅行もあり、或は關西旅行もあれば北陸旅行もあり、そして、長きは月餘に亘るもあり、短かきは三日乃至五日にして終るものあり、期節のごときも、或は春、或は夏、或は秋、或は冬と、更らに定めなきがこの行の特色である、従つてその見聞する所のものも、又多方面に渡つて、種々なる珍談雑多なる奇説に富むは、又信じて疑はないのである、之れこの行の野宿旅行と大に趣を異にする所以で、又聊か鐵脚子の本領を發揮した旅行と言つても差支はない。が、之抑鐵脚子一人のみの旅行で、敢て之を讀者に向つて勧め且つ煽動するのではない、况んや之を學ぶに於てをやだ、要はたゞ旅行の趣味を讀者に紹介するまでと。

二 上信旅行、出立、旅費、子供と喧嘩、敗北、
山中の一人旅、碓氷の嶮道、輕井澤の氣候、

東京を出たのは一昨年の五月二十六日、それから上州の碓氷部に知人を訪ねて、茲に滞在が約一ヶ月半、即ち碓氷部を出發したのは、七月の中旬であつた。
東京から殆んど一文なしで出たので、野に寝ね山に伏し、漸く碓氷部まで辿りついて、茲でさんぐ厄介になつた上、三圓といふ旅費までも頂戴したので、鐵脚子に於ては近來にもない懐中の重さである。
碓氷部を發つたとき更らに握り飯の七ツも頂戴して、それを背に荷つて、ステッキを振り廻はしながら元氣よく出たのは、午前五時頃であつた、尤も笠と蓑だけは何處へ往くにも離したことはないのです。

妙義街道を約一里も辿つて、突元として雲表に聳ゆる妙義山を朝霞の中に眺めて、それより更に右に折れて、桑畑やら麥畑やらを通り抜けて、碓氷川の橋を渡れば、直ぐと松井田の町へ出た。一

町へ出た時は彼是六時頃、此處彼處では早や戸を開けて、掃除をするやら往來を掃くやら、娘が水を汲めば子供の戯れて居るもあり、駄馬が通れば荷車も來り、喧嘩は一通りでない、町端れに至れば、茲には又もや七八人の兒童が、稻荷の社前に寄り集ふて、走るやら跳るやら、嬉々として戯れて居たのだが、今しも予の通行するのを見て、彼等は一齊に遊戯を止めて、そして、不審の眉を顰めて自分を見詰めつゝあつた、突然、群童の一人から、彼奴は何だい、の言葉が漏れた。

予は思はずも振り返つた。

「何んだ、氣違ひかい。」

予は彼等の無邪氣なる言葉に一番翻弄つてやらんもの。

「何だとは何だ、人間だ。」

と態と恐い顔して見せれば、彼等は恐れて遁げるかと思ひの外。

「人間は極つた居らい、氣違ひだつて人間じやないか。」

「俺が氣違ひなら手前等も氣違ひよ。」

「嘘言ふない、俺は手前のやうな風采はして居ないぞ、馬鹿野郎。」

「馬鹿野郎とは何んだ子供の癖に、大人を捕へてそんなことを言ふと承知しないぞ。」

「承知しなくつても好いや、爲るなら勝手にしやがれ、馬鹿野郎の氣違ひめ。」

予は彼等が虚勢の甚だ横着にして生意氣なるに、一ツをこびてやらんものと、手に持

たるステッキを持ち直して、二足三足追ひかくれば、彼等は慌てゝ社の影に隠れたの

で、予は大聲に、態ア見やがれと、悠々として歩を返せば、彼等は又もやどやどと

現はれて。

「態ア見やがれとは何だい、手前こそ態ア見ろ。」

と言ひ終るや、一童の忽ち小石を拾つて、予を見掛けて投げつくれば、衆童又之に倣

つて、一入虚勢を張りつゝ、一齊に投げつくる石は宛から雨のごとく、勢當りがた

きに、予は謝つた〜と言つても聞かばこそ、彼等は益々近づいて、投げては進み、

進んでは投ぐるにさすがの予も閉口して、一目散に逃げ出せば、彼等は凱歌を擧げつ

ゝ尙ほも追ひかくるに、こはいよく叶はじと、益々閉口してひた走りに走れば、途

端に背の風呂敷包は解けて、中より大事な握り飲がころ〜と轉がり落ちたる仕末に、

之れ失くしては一大事と、二三歩駆け戻つて、地上に轉々して居る握り飲を掻き集め

て居る際、端なくも腕白小僧の投げた小石が頭へこつり。

餘りの痛さに我れ知らず疝癪が起つて、己れこの小僧奴等何うして呉れるか見ろツ、

と皆を裂いて睨みつめては見たものゝ、まさか子供を相手に喧嘩も出來ず、仕方な

く往生して、握り飯を抱けたまゝ、又もやひた走りに遁げ出した、後には群童の凱歌

がたどわい〜と。

ふとじたことから子供にからかつたのがそも〜、頭に瘤までこしらいて、さんぐ〜

の體で遁げ出して、さてつくづく、考へて見れば、今更我ながら阿呆らしく、もう二度と子供になんぞ構ふものでなにと、痛い頭を押へながら、急ぎ足にすたくと歩めば、今度は路傍の桑畑の中で、切りに桑を摘みつくある五六人の女供が、手を見て指笑し嘲弄しつくあるに、癩には障るものゝ、之も女で見れば怒られもせず、何せこの邊のものは人が悪いか知ら、之も矢張り風俗人情の然らしむる所かと、後をも見ずに行手を急いだ。

横川を過ぎて一里ばかりも進めば、途は漸く峻険なると共に、四邊の景色は眼も覺めなんばかりの美しき姿を以て、眼前に横はつて居る、突兀たる妙義の山は漸く微かに頭を現はして雲表に聳え、連脈又突兀として左に聳ね、鬱蒼綠滴たる樹林の間より、一條の瀧は白く長く落ち、下には碓氷の溪流帯のごとく蜿蜒として流れ、右には飯倉山脈崎嶇として重疊し、前には碓氷の峻巖途を遮り、山又又の峻道は、予をして覺えず往年の野宿旅行を追想せしめたのである、然り、磊々子漂々子の二子と、嘗つて

途なき山中に踏み入つて、冒險的旅行に思はぬ難儀を見たのも、恰度この右より折れたる野徑を辿つたのではあるまいか、雨に惱み風に苦しみ當年の困苦を嘗めた場所は、あゝこの飯倉山脈ではあるまいか、と思へば、今も尙ほ當時の光景があり／＼と映じて、あゝ磊々子が居たなら、と言つた所で、この行固より予一人なれば、この美事なる景色も誰に見せんよすがもなく、獨り四邊の景色を貪りつく、爪先上りの山道を辿り往けば、早くも碓氷峠の險道にかゝつた。

昔はこの山道も馬車で往來したのださうだが、今は汽車といふ便利のものが出来て居るから誰とてこの舊道を辿るものなく、偶々ありとすれば、鐵脚子のごとき野暮漢か、或は旅費に缺乏したものゝ止むなく茲を通行する位のものであらう、五町往き十町往き、半町往き一里往いても、果して一人の旅人にも出逢はないのみか樵夫にすら出逢はない、九十九折りなす山又山の峻道には、たゞ予と予の影の二つのみが淋しげに辿りつくあるのみである、尙ほ一里餘りも進めば、途はいよいよ險に、山はいよいよ

窄り、而して景色は更らにいよ／＼奇絶なるに、予は我知らず足を止めて、その自然の風光に恍惚として殆んど身の茲にあるをも忘れて見惚れて居た、ふと耳に止まるは丁々たる伐木の音、而もその淋しげなる音が卻に響いて、一種凄絶なる感を與へるのだが、その聲が何となく趣味あるごとくに聞きなされると共に、恰も空谷廻音を聞くかのごとく、思はず音する方を願れば、遙か奥まりたる溪間に當つて、果して樵夫のその姿が見られた、そして、その傍には木小屋が設けられて、恰も山中の一ツ家のごとき面影を呈して居る、この景この境の自然の美觀に對しては、何で之を等閑には看過することが出来よう、殊には急ぎの旅でもなければ、兎に角茲で一休息して往かんものと、溪流に臨んだ傍の體好き場所を撰んで、薦を敷いてごつかりと腰を卸した。

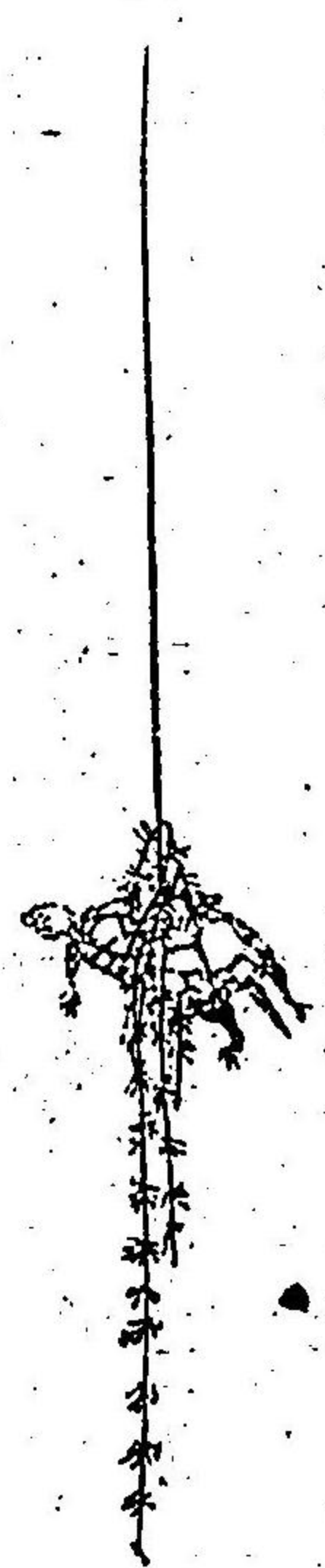
も恣まよ／＼にこの景を貪りつゝあることの、却つて之が自由にして又吞氣である、前を望めば雄峻奇峰は兀として雲を凌ぎ、近きものは雲よりも青く、遠きものは烟よりも淡く、下を望めば懸崖砥のごとき處に、碓氷の上流は奔湍雷のごとく、水激し巖叫び、濛々の響き幽かにして梢の嵐に咽び合ふさま、實に山紫水明の仙郷とはこのことであらう、予は夢のごとくに茫乎として、暫し俗念を脱して自然の美に打たれて居た、突如、璘々たる鈴の音は長閑にこの空谷に響いた、と思ふと、頬冠りした馬士の駄馬を曳きながら、彼方の坂を下りつゝ來るのであつた、その悠長なる姿、その長閑なる態、更らに一種の趣きを添へて、宛然一幅の畫をなして居る、あゝこの景この境、予はその長閑にして幽邃なる別天地の美に打たれて、思はず薦の上に横はつたまゝ何時とはなく華胥の夢に入つた、恐らく夢は天上の御國に遊んで居たであらう。

チリ／＼と身體が焼けるごとき暑さに驚いて、ふと眼を覺ませば、太陽は頭の上まで来て、身はまともに照り附けられて居る、さてはもう餘程寢たのでもあらうと、仕

度をして起ち上つては見たが、朝の涼しさに引き代へて、草も木も萎れんばかりの炎天に、身も心も頼みに勇氣を失つたのだが、さりさて何時までも茲に居る譯にも往かず、仕方なく薦と笠に炎熱を避けつゝ、羊腸のごとき嶮路を右に左に。暑さは暑し、途は益々險に、往けどもく中々に人家もなく里らしき處もなく、たゞ今來た途に一二の茶店らしきものがあつたばかり、人にも逢はねば獸にも逢はず、玉のやうな汗を全身に浴びて、上つては下り、下つては上り、右に折れ左に曲り、歩んでは休み、休みては歩み、辿りくつて、漸く下り坂になれば、早くも彼方に當つて、里より昇る夕烟が長閑なる空に蹊躑いて居る、さては漸く里へも近づいたのかと、疲れた足を引きすりく、途の五六町も辿れば、漸く輕井澤へ出た。途の嶮なるに、疲勞と汗とに全身蒸さるゝごとの暑さを感じたのだが、輕井澤の停車場に一休みした時には、全身の汗は頼に收まつて、それにつれて寒氣はぞくぞくと身に浸みて來る、輕井澤の寒氣とは兼々聞いて居るのだが、僅か碓氷峠一つを越せば

かくも寒暑の差があるものかと、單衣の袖を掻き合せて、片隅に少さくなつて居れば、人は皆予を怪んで怪訝の眼を見張つて居る、人の風采を見て怪むとはそもく無禮な奴と、態とそれ等の旅客を睨み返せば、成程怪むのは無理もない、予れ一人は單衣一枚といふ扮装なれどもこの界限のものは皆單衣に拾羽織、さもなければ、袷に拾羽織といふ仕末、東京を出る時は單衣一枚でも尙ほ暑さを感じた位なるに、茲は又袷に拾羽織を重ねる程氣候の相違があるので、今更予の風采が何だか耻かしいやうな氣持ち。時計を見れば早や四時五分前、瀧車に乗つて小諸までとも往かんかとは思つたが、否々、瀧車や瀧船は我が黨野暮漢の禁物として居る所なれば、たとへ懷中が暖かなるにもせよ、之はまあ乗らぬことく、それよりか之を以つて旅人宿へでも宿つて、少つと贅澤な旅行でもしてやらんものと、又も停車場を後にして。輕井澤からは坦々砥のごとき一本道、左右はたゞ漠々たる曠原で、その曠原の盡くる所、右も左も前も後も、皆山又山を以つて包まれて居る、景色とては格別佳くもない

が、たゞ淺間の噴烟が遠く黒蛇のごとく天に驟變て居るのが、稍々壯大な奇觀を呈して居る、趣味もなき面白味もなき街道を一二里も辿れば、早や太陽は西に傾いて、餘光が遠く山の一角を染めて居るばかり、漠々たる廣原は蒼然たる暮色に包まれて、一種又凄壯な感を起さしめる、辿りくって、四邊の薄暗くなつた頃、漸く御代田の町へ。



三 旅人宿の御断り、茶店の御厄介、若者の談

話、木賃宿

日はもう暮れて、之から歩いた所で夜道せねばならず、御代田に着いたを幸ひ、殊には懷中も暖かなれば、今宵は旅人宿に宿つて、一日の疲勞をゆつくり休めんものと、一番好さそうな旅人宿を見掛けて、つかくと進み入れば、番頭初め女中までが、孰れも予の風采を怪んで、快い顔だにせぬに、少々疝癪には障つたものゝ、之も自分の風采が悪るければ仕方はないと、態と下から出で、一晚厄介にと言へば、お生憎様、室は皆塞がつて居ますからこのことに、一旦断はられたのを、この上強てとも言はれず、頭かきく悄悄と立ち出て、今度は隣りの旅人宿へ往けば、茲も同じくお生憎様とのこと、こんな風では何處へ往つても覺束ないようなものゝ、と言つて宿らねば野宿でもせねばならず、金がないなら兎も角、懷中には友人より恵まれた大枚三圓の金さへあるものを、金を持ちながら野宿せねばならぬことゝは誠に情けなきものと、町

の左右を見廻しつゝ、今度は汚なさうな旅人宿を見掛けて這入り込めば、店には薬罐頭の爺さん一人と、それに女中らしきものが襷をかけたながら店に立ちつゝあるに、この家なら大丈夫と、笠を脱いで店に腰掛れば、薬罐頭の爺さん怪訝な顔して、が宿りですかといふに、さてこそ推量の通り此家のみは大丈夫と、安心して草鞋を脱ぎかゝらんとすれば、お氣の毒ですが今晩は残らず室が塞がつて居ましてといふに、開いた口の塞がらぬ程の失望、折角安心して草鞋までも脱ぎかゝらんとする途端に、何事ぞ體好きお断はりを喰はんとは、極りが悪るいやら耻かしいやら、お負けに癩に障るやら。

込み上げる疥癩を押へ付けて、悄悄として往來へ出れば、四邊は早や暗くなつて、町々は皆火が點されて居る、見廻した所、他に旅人宿らしきものはなく、と言つて何處でも宿めては呉れず、茲なら大丈夫と、一番汚なさうな所でさへ断はられるものを、好し他に尚ほ旅人宿があつた所で、固より快く宿めて呉れさうな所もなく、この上

は夜道するか野宿するか二ツを撰ばねばならず、夜道と言つても早や疲れ切つて居る身體に、この上二里三里は思ひもよらず、止むなく野宿でもするより外はなしと、元來た途を引き返して、殆んど無意識に足を運ばせては居たものゝ、考へて見れば馬鹿々々しいやら癩に障るやら、懷中に金はあつても使ふことも出来ない仕末とは、文明開化の今日の世に、こんなそんなかんの話はなければ、でも實際さうなのだから仕方はなく、あゝ之も矢張り風采が悪いからのこと、風采さへ好ければ先方で手を擦しても、頼まうものを、人よりもへんてこな自分の風采では先方で怪むのも無理はない筈、あゝ風采なるかなと、今更自分の異様の風采を悔んでも仕方はない、之も野暮漢の本領なればと觀念して、力なく歩を運びつゝあれば、町外れの右手に當つて、小さな茶店がある、醜憤を漏らすには之れ屈竟な所と、つかつかと進み入れば、又もお断はりを喰ふかと思ひの外、茶店の婆さん機嫌よく迎へ入るゝに、漸く安堵の胸を撫で下して、片隅の椽臺に腰を下しながら、兎に角酒と肴を命じた。

店の片隅には、村の若者が二三して早や傾けつゝあつた、が、今しも這入つて往つた自分の姿が、彼等の眼には異様に映じたのであらう、彼等の視線は一樣に予に向つて注がれた、予は婆さんの汲み出す澁茶に咽喉を濕して、同じく彼等の一團を目送して居た、彼等は早や餘程傾けたのであらう、孰れも頗る酩酊して、その談話が既に調子を失つて居る、間もなく予が前にも杯盤は運ばれた、予は杯を取るより早く、二三杯をつづけさまに。

田舎料理の固より佳肴はなけれど、酒さへあれば不足はなき予のことゝて、僅かの肴に舌鼓を打ちながら、一本二本と傾け終れば、空腹に熱燭の浸み渡つて、酒量多き予の常にも似ず洵然として酔つて了つた、酔つて了へば不平もなく苦勞もなく、旅人宿に冷遇されたことや、今宵宿る宿がなからうが、そんなことに一切頓着はない、たゞもう心地好く爽かに長閑に、面白く可笑しく楽しく又嬉しく。

予は早や洵然として酔つて了つた、彼等の一團は何はよく多く酔つて居る、予と彼等

の視線は時々衝突する、その衝突する都度、彼等の眼は孰れも怪訝に光つて居る、その怪訝の餘りは、先づ彼等が一人の口より端なくも、「お客さん。」の不審の言葉が漏れた。

「何かね、」

と予も又酔眼を見張つて彼等を見返した。

「お客さんは何處だね。」

「予かね、東京からぶら／＼やつて來たのさ。」

「へー、遊びにですかい。」

「さうさ、遊びながらやつて來たのさ。」

彼等の視線は何れも一樣に予の身上に注がれて居る。

「お商法は？」

「ハ、ハ、商法かね、商法と言つたつて格別之といふ商法もないね。」

「そんなら矢張り彼の月琴など持つて歩く御連中なのかね。」

ホーカイ節と間違ひたのであらう、予は餘りその無遠慮な言葉に少々癢には障つたものゝ、之も田舎者なれば仕方はないと、態と哄然として笑ひながら。

「ハ、ハ、ハ、そんなものに見わるかね。」

「違ひますかね。」

「こゝろ見へてもそんなもんじやないからね。」

「へー、そんなら何んですかね。」

「書生さ。」

「書生ツて何のこんですわ。」

書生を知らぬ田舎者では益々語るに資格はないと、予は何と言つて答へて好いかそれさね分らず。

「書生かね、書生は矢張り書生さ。」

彼等は益々怪んで予を見詰めて居る。

「今夜は茲へお宿りですかね。」

「さう、茲へ宿るつもりで居たのだが、何處へ往つても宿めて呉れる所がないから困

まつて居るような譯さ。」

「へー、何うしてどうしよう。」

「何うしてだか予にも分らんかね、多分予が餘り怪しな風采をして居るので、それで怪んで宿ないんだらうね。」

「へー、そうですかね、と彼等は今更予の風采を眺めて、成程その風采では、と言はぬばかりの面持ちで。

「何處でも宿めないんですかえ。」

「さうさ、何處でも宿めて呉れないのさ。」

「そんなら何うするんですえ。」

「何うするつて何うにもかうにも仕様がないう、だから困つて居るんだ。」

「之から何處へ往くんですえ。」

「何處と言つて往く所はないから、仕方がねえ之から夜道でもして、先きの宿へでも往つて宿らうかと思つて。」

「先きと言つたつて未だ餘程あるからね。」

「餘程あつても仕方がないさ、さもないければ野宿でもするより外ないのだから。」

「野宿ツて何うするのだね。」

「野宿は分らず書生は分らず、少つと六ヶ敷こども言はうものなら何一つとして解せぬ田舎者のことだから、言つた所で無益なこども、予は駄つて尙ほも杯を傾けつゝあれば、彼等は執念く迫つて、親切なのやら氣の毒がるのやら、切りに右左から彼是と煩さく尋ぬるに、さうく駄つても居られず。」

「野宿ツて野原へ宿るのさ。」

「へー、と彼等は又喫驚して居る。」

「そんなことが出来ますかえ。」

「出来ないと言つたつて仕方がないさ。」

「でもそんなことはね……、金がないんですか。」

「金なんざア持つて居るよ。」

「金さへあれば何も心配することはないぢやないかね。」

「所が金があつても何うにもならないんだ。」

「何うしてかね。」

「だから金を持つて居つても宿めて呉れる所がないんだ。」

「へー、不思議だね。」

「不思議さ。」

「何處の旅人宿へ往きましたね。」

「この先きの二軒に、それからもう少し先きの汚なさうな宿屋と。」

「何處でも断はつたんですかえ。」
「そうさ。」

「何と言つて断はつたんですね。」

「室が塞がつて居るッて。」

「へー、そんなことはあるまいがな。」

「でもそうなんだから仕方がないさ。」

「全體お前様の様子が變だからね、こう言つちやア何だけれども。」

「全く其處だて、予がこんな風采をして居るから金を持たないと思つて居るんだらう。」

「う。」

「そうだね、全く。」

「何うだね、もうこの外に宿屋はないだらうか、宿めて呉れそうな處は。」

「そうだね、未だこの外にもないことはないが、矢張り断はるだらうね。」

「それじゃア何にもならないさ。」

「ハ、ハ、ハ、そうだね、そんなら俺が確かな處を教えて上げますかえか。」

「確かな所があるなら、何うかそうして貰ひたいんだね。」

「少つと汚い所だがね、それを辛抱が出来るなら教へますかえ。」

「なアに汚なくなつて構はんよ、野宿するよりは好からうから。」

「そうですともさ、そんならこの町を外れると右側にありますからね、往つて見なさい、燈籠に角屋と書いた古い家がそれなんだから。」

「そこは大丈夫かね。」

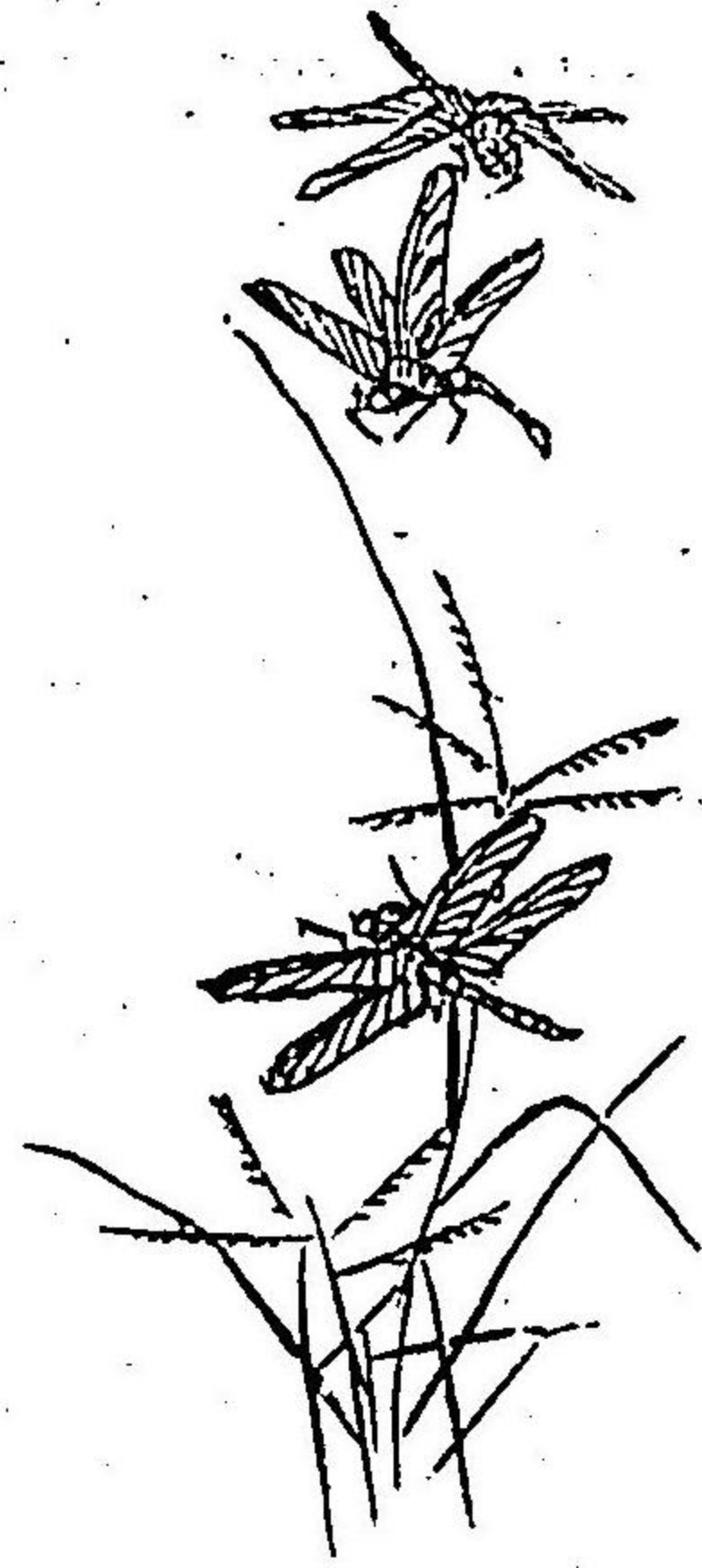
「そこならもう大丈夫だからね、それでも断はつたら又來て見なさい、外を又心配して上げるだから。」

「そうかね、それは何うも難有う、そんなら往つて見ようか。」

「勘定を濟ませて、若者にも挨拶して往來へ出れば、空には朧月がかゝつて、風はそ

よくと冷たく吹いて居る、お負けに一杯機嫌ではあり、宿は何うやら見附つたやうな譚、心は伸々として氣も悠然。
教えられたごとく町外れに至れば、果してうすぼんやりとした燈籠が町の右側にかゝつて居る、近づいて見れば、こはそも、旅人宿は旅人宿に相違なきも、木賃宿の文字が明々と書いてある、旅人宿といふに大に勇んでは來たものゝ、木賃宿といふには少々落膽した、と言つて今更引き返へされもせず、引き返した所で宿る所がなければ仕方はなく、止むなく往生して、兎に角屋へ入つた。
一晩厄介になられようかと言へば、帳場に居眠りして居た爺さん喫驚顔を振り上げて予の風采をつくつくと見つめて居たが、格別怪みもせず、快く迎へ入れるに、一先づ安心して、足を洗つて導かれ室へ通れば、其處には早や商人らしき男が、予の入つたのも知らずに眠つて居た、室を見廻せば、木賃宿にも似ず小瀟洒として、疊も夜具も思つた程に汚なくはなく、之が先づ何よりの御馳走と、そのまゝ件の男と頭を列へ

て、枕に就くが否、酔と疲れに前後も知らず。



四 朝ッバラの酒、規約躑躅、馬上の得意、落馬の失

敗、旅人宿の御断り、知遇の旅人宿、女中の談話

翌朝眼を覺せば、彼の男は早や立ち去つて了つた、八時頃でもあらう、往來では馬や
ら車やらで騒々して居る、さては餘り寝過したわい、と矢庭に飛び起きて、仕度もそ
こく、宿の爺さんに暇を告げて、菅笠肩深に行先を急いだ。
途は相不變砥のごとき大道、歩くには持つて來いの途だが、その代り木もなければ林
もなく、趣味なき殺風景な一本道、たゞ遠く淺間の烟りや、元として聳ゆる趣きなき
連山の四方を廻つて居るばかり、談話相手もなければ道連れもなく、杖を便りにてく
くとい通りつゝあれば、今朝は未だ飯粒一ツ咽喉へ通さぬことゝて、腹の虫は遽に暴
れ出し、眼も眩めば足も重たく、四邊を見廻しても茶店らしきものなく、空腹かゝね
て尙ほ一里ばかりもたざれば、漸く村端れに一軒の茶店を見出した。

躊躇もなく茶店へ飛び込んで、兎も角飯を頼めば、飯はお生憎様とのこと、落膽して
外のものを頼めば、菓子とお酒の外には何もないといふ、菓子は元來禁物なれば在つ
た所で仕方はなく、酒と來ては夜も日もなければ、餘り裕ならぬ旅費の、殊には昨宵
茶店に若干の散財をなせしことゝて、今日は義理にも辛抱せねばならぬのだが、生憎
空腹を満すべき程の食物もなく、止むを得ず銚子一本に有合せの肴を命じて。
空腹に浸み渡る酒の、酔は早くも全身に廻つて、何だか五六本も傾けたやうな酔ひ方、
と言つて一本では中々止せさうもなく、更らに一本を命じて、漬物やら肴やらをたら
ふく詰め込めば、腹は之で充分出來、殊には酒機嫌の勇氣は満ちくゝて、今までの空
腹やら疲労やらは何處へやら。
十八錢五厘の勘定を濟ませて、往來へ立ち出れば、酔は益々全身に廻つて、足は思ふ
ように運ばれず、右にゆらり左にゆらり、薦を肩にして蹠蹠として居る姿は、路傍の
人から見たら如何に異様に見えたであらう、行人は果して見返りくゝ目送して居る、

が、予は一向平氣なもの、而も得意然とステッキを振り廻して、大道を濶歩しながらぶらりく、それで心は慥かなもの。

酔が廻つて身體は熱し、お負けにお太陽様は頭の上から遠慮もなくチリく照りつけて、薦も笠も何の用を爲さず、身體は宛から煮られんばかりの苦しさに、眼は眩めき、汗は瀧のごとく、足ばぶるくとして今にも倒れさう、休むにも日蔭はなし、歩くにも足は疲れ、たつた今の勇氣は瞬間に失せて。

漸く木蔭を見附けて、兩肌脱ぎながら玉なす汗を拭きく、暫し涼を入れて疲れを休めつゝあれば、そよく吹く風に蘇生の思ひ、心地好さは又今更、が、その心地好くなるにつれ、遽に睡魔は襲ふて、寸時も堪へられずばこそ、何うせ急ぎの旅ではなし、緩くり休息んで往かんものと、薦を展べてごろり横になれば、涼風一陣實に千金の思ひがある。

二三時間も寝たであらうか、眼を覺せば太陽は餘程頭の上を通り越して居る、起き上

つて烟草を喫しながら、暫し涼を入れて居れば、彼方より馬を曳きながら悠々と辿り来る馬子がある、近づいて予が前に来れば、早くも彼方より言葉をかけて。

「大層熱う御座りますね。」

「熱いね、何うも。」

「火を一ツ貸して貰へまじやうか。」

と馬子は馬を止めて、腰から武骨げな烟草入を取り出しながら。

「之から何方の方へ往かッじやるだね。」

「予かね、何處と言ふ極りもないが、まア小諸の方へでも往つて見ようかと思つて。」

「さうかね、そんなら馬に乗つて往かねかね、何うせ小諸の方へ歸るのだから、安くしますだよ。」

「そうかね、乗つて見ても好いね。」

「乗つて呉れるだかね、そうすれば私も都合が好いだが。」

「まア物は相談だが、そんならまア乗ることとして、小諸まで如何程で往くね。」

「小諸までは往きまじねのだが。」

「そうか、そんならお前さんの往く所まで往かうじやないか。」

「そうですね、之から二里ばかりも往きますが、十五錢ばかりやつて呉れねかね、それとも高けりやもう少しは負けても好いだから。」

「そうか、此方は安い程好いんだが。」

「そんなら十二錢ばかりにしますべえよ。」

相談茲に一決して、そんなら乗らうといふことに定めたのだが、元來馬に乗るのは生れて之が初めて、且つは旅へ出て馬に乗るような贅澤なことは、我が黨の禁物として居る所で、磊々子や漂々子浪々子などが居やうものなら、それこそ頭からお小言を頂戴するのだが、幸ひ野暮漢は居ず、馬に乗るのは贅澤のやうにも聞えるが、之も後日の話の種なれば、一番乗馬といふ術を覺て、磊々子漂々子輩に一泡吹かせてやらん

ものと、度胸を据えてヒラリと馬上に跨れば、その心地誠に言はん方なく、確りと鞍にしがみ附いて、右に揺られ左に揺られ、ぶらりくと徐に揺られつゝあることの、何だか船か籠にでも乗つたやうな氣持ち、成程馬といふものは好いものだわい。

一町往き二町往けば、もう鞍の工合も餘程慣れて、手を離しても差支はない、と言つて浮かり手を離せば、稍々ともすると落ちさうなので、恐々ながら注意に注意をして、左右の景色も碌々眺められはせず、たゞ前面の方のみを眺めて。

「オイ、馬子さん、馬も中々好いもんだが、之では随分時間がかかるね。」

「それはもう遅う御座りますだよ、それでも休みませんから矢ッ張り人の歩く位には往きますだよ。」

「そうかね、時にもう何時だらう。」

「そうで御座りますだね、もう四時頃でも御座りまじやうか、お日様が彼んな所へ往つて居ますから。」

「明るい中に小諸まで往けやうかね。」
「大丈夫で御座りますども。」

「そうか、そんなら安心だが、時にお前は何處まで往くんたい。」

「私はもう少し先きから右へ曲りますだよ、彼の先方に見ゆる村まで。」

「そんならこの近所だね。」

「ハイ、直き彼處で御座りますだ。」

「この邊に何處か見る所はないかね。」

「何んな所ですかい。」

「見物するような所さ。」

「もう少し先きへ往けばありますが、この邊では格別見るやうな所もありませんね。」
「そうかね、何うもこの近邊は景色だッて好くはないね。」

「そうで御座りますだよ。小諸を越えて先きへ往きますればだんく景色も好くなり
ますだがね、お客様は何ですかね、この邊を見物にでも御座らしたんで？」

「まアそんなやうなものさ。」

「東京からですかね。」

「さうだよ。」

「好くね、東京から貴所のやうなお方がちよいく來ますだよ、淺間山へ登つたなん
かして。」

「さうかね、淺間山は近いかね。」

「之から譯はありまじねのだが、山へ登るにはこの後の追分といふ所から登るのが順
當で御座りますね。」

「フム、見るだけの價値はあるかね。」

「格別面白くも何ともねねが、東京邊から來るお客様は皆登りますだよ。」

『どうかね、』と遙か淺間の方を望めば、今しも空は夕榮じて、その彩られた間を、絶巔から吐き出す濛々たる黒烟は、恰かも黒蛇の怒つて天に冲するがごとく、麓の野や村は、一面に黄金色に染められて、夕暮れの眺めは殊に周圍の壯大なるそれだけ又一種雄大の景色を具へて居る、あゝ好い景色だな、と予は思はずその美に打たれて、心を彼方に馳せて居れば、途端、馬は石に躓いてか、がくりと膝を折つたので、ハッと驚く閑もなく、予が身體は中心を失つて、突然鞍より大地に跳ね落された。五尺ゆたかの大の男が、馬上より大地に搭と跳ね落されたその不體裁は、恐らく傍から見ても居たら定めて滑稽であつたらう、が、予自身に於ては、中々滑稽でもなければ可笑くもなく、搭と落つるが否早や腰骨をしたゝか打つて、息の音も絶わさうな痛さ、しがめツ面で腰を擦りながら、漸く起き上れば、馬子は駈け寄つて何うかじたかといふ、なアに何うもしないが、と言つても實は何うもして居るので、餘りの意氣地なさに態と平氣を装ふては居れど、装へば装ふほど益々痛く、イヤ馬子さん、飛んだ目に

あつたよ、もう〜馬は懲り〜だ、と泣き面と言へば、馬子はハ、と笑つて、浮つかりして居ると好く落ちますだよ、それでも怪我がなくツて僥倖で御座りましたよ、と氣の毒さうな顔でもする所か、浮つかりすれば落ちると、暗に予の間拔なるを嘲けるごごく聞きなされるに、痛い目をしてお負けに冷嘲されては割に合つた話でなければ、過失なれば怒られもせず、澁々馬の後に隨いて、ステッキを突きながら跛引き〜。『もう乗りましねえかね。』『もう眞平々々、この上無賃で乗せて呉れても御免被るよ、ハ、ハ、ハ。』『さうか、そんなら別れるとさうか。』と五六町來てから、定め賃金を拂つて、馬子は右へ、予は一直線に。我が黨の規約を破つて、柄にもない馬なごゝ洒落た天罰は靦面、馬から落ちて腰骨を

痛くして、お負けに大枚十二銭の賃銭を取られて、こんな割に合はない話はないが、之も磊々子漂々子などの蔭で祈つて居たのかも知れずと、自から求めた天罰と觀念して、とぼくと辿りつゝ、點燈頃漸く小諸の町に入つた。

昨夜は見事に旅人宿を断はられて、野宿でもするより外策のなかつた所を、漸く村の若衆に教へられて、何うにか一夜の時を定めたものゝ、昨夜に變らぬこの風装では、今宵の宿も又覺束なしと、早や断はられたやうな氣で、胸蕪かしながら恐々町の左右を見廻しつゝ進み往けば、何時しか停車場の前へ出た。

汽車は今到着したばかりで、構内は潮のごとくに雑沓して居る、旅人宿の客引は此處彼處に陣取つて、怒鳴るやら叫ぶやら、騷擾は一入激しく、乗客は早や車に乗るやら客引に案内されて往くやら、がや／＼とたたく、宛がら鼎の沸くがごとくで、何時靜まるべしとも見えない、予は暫し茫然としてその雑沓を見物して居た、が、一人去り二人去り、さすがの騷擾も五分の後には、悉くその影は消れて、残るはたゞ予の異

様な姿のみ憐れげに。

乗客の去つた後、予は徐ろにその歩を運ばせて、停車場前の左右の旅店を覗きつゝあつたが、客引きや番頭が門口に立つて居つても、一人として予を呼び止めるものがない、あゝ風采の善悪でかくまで待遇の違ふものかと、つく／＼情けなく感じられる、と言つて何時まで歩いて居た所で、誰も先方から宿つて呉れといふものなく、止むを得ず此方から頭を下げねばならず、仕方なく尤も入り易さうな旅人宿を見掛けて、一晩御厄介になりたいが、と言つても、番頭一目見るより早やお生憎様を振り廻して、見返らうともしないといふ有様、餘りの憎々しさにもむら／＼と疝癢は込み上げて、己れこの無禮者、手を破落者か壯士とでも見てか、と皆を裂いて睨み付けても、先方には一向何の感じもなく、地團太踏んで口惜がつても追ッ附かず、仕方なく悄悄とこして、店を立ち出るその間の悪さと言つたら、疝癢は徒らに高ぶるのみで。今度こそはと、一軒置いて隣りの旅人宿へ飛び込めば、茲も同じやうなお断はりで同

じやうな待遇、予も又同じやうな疝癢を起して同じやうに怒つては見たが、矢ッ張り詰る所は同じやうな結果、一軒なら兎も角、二軒までお断はりを喰つては、もうこの上は見込みもなく、今夜こそは野宿でもせねばならぬことかと、情けないやら怨めしいやら癢に障るやらで、胸はむちやくちや、一二町は茫然歩いて居たが、この時突然横手の方から。

『お宿りなさい。』

と優しい女の聲、此方から頭を下げて頼んでも、何處まで宿めて呉れるものはなさに、之は又意外、定めて外の人を呼んだものかと、四邊を見廻してもそれらしきものはなさに、矢ッ張り自分のことかと、聲のした方を見遣れば。

『お宿りなさい、お安く致しますから。』

と大丈夫子を見て進めるに、何だか遽かに知遇を忝なうしたやうな氣持ち、渡りに船と、喜び勇んでつかくと進めば。

『入らツしやい、お客様。』

と不機嫌な顔をするごころか、元氣好き愛想ある勿體ない程の聲。

足を洗つて、女中の案内で座敷へ通れば、四疊半の小綺麗な室、間もなく茶は出る菓子が出る、何うしても普通一通りの待遇、之で漸く安心して、疲れた足を揉みながら、心も伸々として、横になつて烟草を吹しつゝあれば、最前の女中入り來つて、お風呂へお入りなさいといふ、さては湯までもあるのかと、一入心嬉しく、早速お言葉に従ひ、塵や汗に塗れた身體を悉く洗ひ落して、氣持好く座敷へ返れば、氣は爽かに心は長閑に、何だか遽かに甦つたよう。

他の冷遇に反して茲のみは満足な待遇を受けたので、何だか恩人のごとく知己のごとく、その知遇に感じては勢ひ茶代の必要がある、そこで大枚三十錢を奮發して、女中に茶代として渡せば、恐入つて難有がつて、お禮を言つて引き下つた、實はこの際三十錢の大枚は容易ならんのだが、その待遇の厚さに對して、その知遇の恩に對しては、

三十銭の茶代固より意とするには足りない、否、時としては懐中 悉く抛つても惜むには足りない。

氣持ちは好し、愉快ではあり樂しくもあるので、この際はれ酒なかるべけんやと、手を叩いてお銚子を命すれば、女中は委細畏つて引き下つたが、間もなく膳とお銚子は運ばれた。

腹は空いて居る、殊にお銚子の顔を見ては片時も堪へられず、膳が来るが否奪ひ取るやうに引き寄せて、矢庭に盃を取つて獨酌で傾けんとすれば、アラ、お酌致しますよ、と女中が徳利を奪ひ取つてお酌して呉れるに、恐れ入るやら勿體ないやらで甚だ恐縮したが、之も茶代の利目かと、言はるがまゝにお酌して貰へば、何も御座りませんで、とお世辭さへ言ふ。

「なアに酒さへあれば結構、どうせ肴なんてわいふ柄じやないんだからね。」
と冗談半分嘲弄初めた、と言ふのも、この女中々話せる奴と思つたからで。

「御冗談ばかり。」

「イヤ全くさ、風采を見ても大概分りそうなもんだが。」

「ホ、、、中々口がお達者ね。」

「冗談でないよ、何處へ往つても止めて呉れる所はなしさ、仕方なしに野宿でもしねばならぬことかと、考へ〜茫然して歩いて居た所へ、突然姉さんが呼んで呉れたので、何だか飛び立つやうに嬉しかったのさ。」

「御冗談ばかり……。」

「イヤ、冗談じやないッて言ふことさ、それにしても何うして予のやうな怪しな奴を呼んだね、外にお客もあらうに。」

「でも書生さんと思ひましたから。」

この一語、予は又何よりも嬉しかった、或は壯士と誤られ、或はホーカイと誤られ、稍々もすれば乞食とさへ間違はれさうな所へ、書生さんといふ一語に至つては、益々

知遇を忝けなうしたやうな氣持ち、それにしてもこの女何物かと思れば、年の頃三十にも近いかと思はるゝ何處か垢抜のした女、言葉附から察するも何うしても田舎者とは思はれない。

『姉さんは此處のものぢやないね。』

『ハア、何うして分りますね。』

『言葉を聞けば直ぐ分るさ、東京だらう。』

『ハア、そうですよ、貴所も東京でしよう。』

『さうさ、予も東京だがお前さんは何處だね、東京の。』

『芝に居りましたよ。』

『何時此方へ来たね。』

『昨年の暮。』

『何うしてこんな所へ来たのだね。』

『ホ、種々な事情が在りましてね。』

『お安くないんだらうね。』

『お冗談仰じやッて。』

『そんなら何しにこんな所へ来て居るんだね、何も態々こんな田舎へ来なくッても好

さそうなもんだに。』

『其處に事情があるといふんですよ。』

『だからお安くない事情だらうッてえのに。』

『そんなことなら好う御座りますがね、苦勞ばかりして居ますよ。』

『その苦勞がお安くないんだらう。』

『貴所は見掛けに寄らないお口が悪いのね。』

『だッて誰だッてそう思ふだらう、東京のものがこんな所へ来て居つては、一人で來

たのかね。』

『そんなに根掘り葉掘りして聞なくなつても好ん御座んじよう、人の身の上なんか。』
 『だって何だか聞きたいんだもの、東京のものど聞けば。』
 『それは妾だつてね、東京のお方と見ると懐しくつて仕様がななんですよ。』
 『だから手だつて懐しいから聞くのさ。』
 『だって話すやうな身の上じやアないんですもの。』
 『そんなら強て聞かないがね。』
 『ハア、聞いて下さいますなよ。』
 普通のものなら頼みもせぬ身の上話をするのだが、この女は頼んでも語らない所を見るに、よくよく深い事情のあること、思へば思ふ程聞きたいのは山々だが、語らないのを強て聞く譯にも往かず、獨り彼の女の身の上を様々に解釋しながら、冗談やら馬鹿斬やらに時を移して、姉さんを相手に知らずく傾けつゝあれば、早くも三本の徳利は空になつて居た、飲み足りぬのは言ふまでもないが、さりとして限りある懐中

の餘り馬鹿な真似も出来ず、仕方なく酒は切り上げて飯とした、勿論姉さんのお給仕で、飯が済めば早や疲勞と酔とに遽に眠くなつたので、床を命じて枕に就くが否、前後も知らずに。



五 雨中の旅行、茶屋の休息、我が黨の旅行家、談

話、意氣投合、道連れ、快談壯語、信州蕎麥、

旅人宿の冷遇、警察へ駈け込み、巡査の紹介、

傍若無人、痛飲壯語、復讐の相談、瘦せ我慢の

馬食、満腹の腹痛

翌朝又姉さんのお給仕で朝飯を済し、團飯さへ貰つて茲を立ち出たのは、八時頃であつた、待遇は好かつたし、疲勞は復つたし、足は軽く氣は爽かに。

懷中にもう一圓と三十錢、この上贅澤しては目的地まで達することも出来ず、今日よりは大に儉約せざる可らずと、心を堅めながら、足を早めて只管行程を急いだ。

二三里歩いて、小さな村にかゝれば、路傍の右側に大きな石碑がある、こんな田舎に

すばらしい石碑は何物の記念かと、近寄つて見れば、之を音に聞えた雷電爲右衛門の石碑、碑文を読みながら、一時間ばかりも茲に休息して居れば、今朝より餘り頼みからぬ天氣の、俄かに空はかき曇つて、今にも降り出さんばかりの氣色、さてはと驚いて、慌てて茲を立ち去り、村端へ出た時には早やぼつりくと落ちて來た、もうこうなつては走つたとして飛んだとして追ッ附かず、笠と蓑を頼みに悠然と歩めば、濡れはするものゝそれでも暑いよりは勝手で、涼しくはあり爽かではあり、歩くには却て持つて來いの雨。

田中へ來た頃には雨はやゝ強くなつて來た、が、結局涼しさは増すばかりで、足の運びも更らに早くなる、それに四邊の景色も漸く趣きを生じて、雨の中から山々が烟つて居るなどは、妙更らに深く、村や、野や、森や、林は、皆それ／＼の趣きを添へて、幽大な、壯快な景色は、手をして殆んど雨の中にあるかを忘れしむるのである、野を辿り森を越え、村を過り河を渡り、進み進んで、大屋といふへ着いた頃は、雨は益々

強く降りしきつて、薦から漏れる雨は全身を浸して、不愉快は言ふばかりもない、時間とは見れば、前の小間物屋の時計が今しも二時を打つた、腹は空いて居る、足は早や疲れて居る、兎も角一休みせんものと、彼方此方を見廻しても、生憎茶店らしい所もない、村外れに至れば漸く一軒の茶店があるので、濡鼠のごとき身體を持ち込めば、茶店の婆さん氣の毒さうな顔して、薦を干して呉れるやら笠をかけて呉れるやら、一方ならぬ親切、椽臺に腰をかけて溢茶に咽喉を濕し、所持の團子飯を咬りながら、漸く腹を拵らへて、雨の止むのを待ちつゝあつたが、雨は中々止みさうな氣色もない、困つた顔して空を眺めつゝあれば、婆さん氣の毒顔して、なアにその中には止みますから、まア緩り休んでお出なさいといふ、言葉に従つて尙ほ一時間ばかりを休んで居たが、何時まで経つても止みさうな氣色もないので、思ひ切つて出掛けんとして立ちかゝれば、之も濡れながら入つて來た矢張り書生體の男、見るより早や何だか舊知のやうな氣がして、立ちかけた腰を再び下して、その男を見やれば、彼方より早くも言葉

葉をかけて。

『非道い雨ですな。』

『そうですよ、君も大分濡れましたな。』

『イヤ非道い目に逢ひましたよ、君も矢ッ張り僕のような旅装ですね、して何方へ。』

『僕ですか、長野まで往くつもりですが、殊によればその先きまで往くかも知れませんよ。』

『そうですか、僕も長野の方へ往くのですが、諸共に往きませうか、同じやうな旅行ですから。』

『そうですね、談話相手があつて好いからそうしまじようよ。』

二言三言談話を交えれば、同じ書生仲間のことゝて、早や遠慮もなく談じ合ひ語り合つて、君僕の挨拶はまことに氣樂で又元氣好く。

茶代を置いて、さらばとばかり打ち連れて、雨の中を吞氣に。

君は昨夕何處へ宿つたかを聞くに、小諸と答へれば、僕も矢張り小諸へ宿つたといふ。
『そうかね、僕は小諸へ宿りは宿つたが、イヤハヤ飛んだ目に逢つて、もう少しで野宿でもする所さ。』

『そんなら旅人宿のお断りを喰つたのだね。』

『ハ、すると君もやられたと見えるね。』

『ハ、仰せの通りだ、小諸のみには限らないが、何處へ往つても満足に宿めで呉れる所がないので、之には一番閉口するね。』

さらばこの男も我が黨の士かと、つくづく見やれば、成程袴こそ穿いては居ね、矢張り菅笠に薦といふ旅装、餘り能く似通つて居るので、そぞろこの男が懐しくも思はれる。

『君も随分旅行をすると思はれるね。』

『さうさ、旅行は殆んど仕事のやうにして居るのだから。』

『さうか、僕等も御同様だね、まだこの外に磊々子漂々子などいふ我が黨の士も居るのだが、今回は少々用があるので、僕一人出掛けて来たやうな譯さ。』

『そうかね、それは甚だ以つて頼母しいね、して君は何處から来たのだね。』

『今度は磯部の知人の處から發つたのだが、之から又長野の知人の處へ往かうかと思つて居るのだが、君は何の方面へ往くのだね。』

『僕は何處と言つて定めないので、長野へでも往つてそれから越後の方へでも出て見ようかと思つて。』

『さうか、そんなら長野まで諸共に往かれるね、一人旅は時々退屈をするからね。』

『そうだて、君も随分旅行をして居るようだが、重に何の方を歩いて居るね。』

『僕は重に東北の方だね。』

『さうか、それでは僕と反對だ、僕は重に關西の方で、東北の方は薩張り知らないが、好いだらうね、東北の方は。』

「關西の方は知らんが、兎に角東北の方も好いね。」

「此方の方は初めてかね。」

「なアに此方の方は二三回来て居るがね、昨年の夏も我が黨野暮漢が打ち揃つて、野宿旅行なごいふ物騒な旅行を企てたのさ。」

「さうか、それは面白かつたらうね、僕等も時々野宿をやるが、一人じゃ餘り面白くないね。」

「一人じゃ餘り面白くもないね、同伴がなくツちやア。」

「そうだて、僕などは重に一人旅だが、時には實に厭になることもあるね。」

この男も随分の旅行家と見えて、旅行に就いての経験は可なりに持つて居るので、予はこの上もない談話相手を得た。

互に旅行に就いての経歴や失敗談やらを面白可笑しく語り合つて、雨の降つて居るのも忘れて進み往けば、足は存外はかどつて、上田の町は早や雨の中に霞んで居る。

「大分早く来たね。」

「二人連れだと足が捗るさ。」

「もう何時頃だらう。」

「未だ五時前だらうね。」

「そうか、そんなら茲で宿るのも少つと早いが、何うするね。」

「歩かれるだけ歩かうじやないかね。」

それは予の望む所なので、早速同意して、兎に角往かれるまで往つて宿らうといふことに定めて、上田の町も用がなければ見物もせず、すたくと歩いて居たのだが、彼の男はふと足を止めて。

「何うだ君、蕎麥屋があるから一杯やつて往かうじやないか、信州の蕎麥は名物といふから。」

成程音には聞いて居れど未だ喰つたこともなければ、之も忽ち同意して。

「好し、そんなら喰つて往かう、と矢庭に傍の蕎麥屋へ飛び込んで、店先へ腰かけながら、四邊を見廻せばその不潔さは驚くばかり。」

「オイ君、之が信州の蕎麥屋かね。」

「彼の男は遠慮もなく怒鳴つて居る。」

「だつて君田舎の蕎麥屋だもの。」

「全體何が出来るんだらう、天麩羅なんか出来るか知らん。」

「そんな氣の利いたものは出来まいよ。」

「オイお神さん、天麩羅は出来ないかね。」

「天麩羅ッて何ですかね。」

「と怪訝な顔。」

「オヤ天麩羅蕎麥を知らんのか、蕎麥屋で天麩羅蕎麥を知らんとは不思議だね。」

「そんなものは出来まいねえよ。」

「そうかね、そんならア兎も角出来るものを貰はうじやないか。」

「三十分も待たせられて、漸く出来て来たのを見れば、東京で即ち盛りなるもの。」

「オイ君、純粹の蕎麥は色が黒いといふが、この蕎麥は純白だね。」

「そうだな、之が眞實の蕎麥か知らん。」

「味つて見ても餘り旨くもないので、殊に汁のまづさ加減と言つたら、東京の蕎麥と比しては遙かに數等を下るので。」

「名物に旨い物なしの流かね、こんな蕎麥なら態々喰ふにも及ばんかつた。」

「と小言を言ひながら喰ひ終つて、何程かと聞けば、一杯五錢だといふ、東京の盛と比して正に倍、少々量はあるが。」

「蕎麥屋を出れば早や夕暮れであつた、上田の町もそこ〜に通つて、やがて町外れに

至れば、右手の小高い所に櫓の見えるのが、上田城の遺跡だといふ、オヤ〜彼んな

のが有名な上田城の遺物かと、二人喫驚して、立ち寄つて見物して往かんかとも思つ

たが、往つた所で見る程のこともあるまいと、殊には夕暮れのこととて、そのまゝ通り越して先を急いだ。

冗談やら馬鹿噺やらに疲れも忘れて、只管に道を急げば、早や日は名残なく落ちて了つて、辿るべき道のそれさへ確とは分らぬほどの暗、雨は小降になつたが、月は中々出さうもなく、仕方なく暗の中を一里ばかりも辿れば、漸く坂城といふ所に着いた。

一先づ安心して、町へ入いつては見たが、二人とも孰れ劣らぬ怪しな風采、又今夜も断はられねば好いが、と一人心を痛めて居るに引き代えて、彼の男は一向平氣なものの。

『早く宿らうじやないか、』といふ。

『好し早く宿るとしやうよ。』

言つては見たが甚だ不安心なので、予は彼の男の後に随ひながら、何うするかと見てあれば、彼の男は一軒の旅人宿へつかくと進んで。

『頼まふ、室はあるだらう。』

とこの言葉が如何にも武骨で如何にも横柄なので、之では断はられるのも無理はないと、獨り心の中に笑ひつゝ、何といふかと見て居れば、果してお生憎様といふ。

『ないのか、室は、二人連れだよ。』

二人連れなら大概は安心するのだが、それも満足なものなら兎も角、人よりも物騒な男が、一人なら未だしも、お負けに二人と来ては何で快く承知しやう、却つて先方の疑を増すのみであるに、彼の男はそれとも氣の附かでか、一入言葉を荒らげて。

『オイ、何とか都合は出来るだらう、怪しいもんじゃないよ、金だつてあるのだから。』

その言ひ態が如何にも可笑いので、予は一人後にくすくす笑つて居たが、番頭は一向承知しさうもなく。

『何うもお氣の毒様ですが、生憎室は塞がつて居まして。』

と中々聞き入れさうもないので、彼の男は憤然として。

『そうか、そんなら好いや、失敬な。』

とぶん／＼憤つて出て来た。

『オイ君、君のやうに横柄に言つちやア先方で断はるも無理はないよ。』

『だつて彼れより外に言ひ様がないじやないか。』

『でもさ、もう少し何とか柔しく言はれさうなものじやないか。』

『でも仕方がないさ、そんなら今度は君が談判したまへ。』

『好しそんなら、今度は僕が談判して見ようよ。』

と予先きに立つて、又外の旅人宿へ入り込んで、一晩厄介になれまいかと言へば、矢張りお生憎様といふに、頭かき／＼往來へ出れば、彼の男は待ちかねて何うしたといふ。

『矢張り否けないよ、何うしても。』

『そら見たまへ、否けないだらう。』

『困つたなア。』

『何せ信州といふ所はこう旅人宿が冷淡だらうな。』

『それは矢張り僕等の風采が怪しいからさ。』

『だつて百姓や商人を見たまへ、僕等よりは却つてまづい風采をして居るよ。』

『でも商人や百姓はそれで通るからな。』

『全體失敬だよ、この邊の旅人宿は、人を侮辱して居やがるんだもの。』

『それは侮辱して居るともさ、でも何と言つたつて此方で風采が悪いのだから仕方がないよ。』

『まアもう一度外を聞いて見やうじやないか。』

と、又も他の二三軒を尋ねて見たが、何處でも同じやうな挨拶で、更らに宿めて呉れる所がない、二人の溜息は思はずも諸共に。

『何うも仕方がないな。』

『困つたなア。』

『こうなりや野宿でもするより外に策はないのだからな。』

『まさかこんな雨の降つた後で野宿が出来るもんか。』

『それもそうだが、だつて仕方がないじやないか。』

『まア待ちたまへ、僕が名案を考へたから。』

『何んな名案だえ。』

『まア黙つて僕に隨いて來たまへ。』

『大丈夫宿れるのかい。』

『大丈夫だよ、心配せずに隨いて來たまへ。』

とこの言葉が如何にも安心して落着いて居るに、予も多少安心して、その後隨ひ往けば、彼の男は黙つて先きに立ちながら、右に往き左に往き、往つたり戻つたり、何

物か尋ねるような様子なので。

『オイ君、何か尋ねるのかい。』

『まア好いから黙つて居たまへ。』

と尙ほも彼方此方をぶらついて居たが、間もなく彼は在つたくと叫んで、前の方を指すに、何物かと見れば、瓦斯燈に坂城分署とある。

『オイ君、警察へ宿るのかい。』

『まア好いから君は此處に待つて居たまへ、僕の來るまで。』

と言ひ残して、彼の男はつかくと門内に入つた。

何をするのかと、聊か心配して、稍々十分も待つて居れば、やがて彼の男は巡査を伴ふて來た。

『オイ君、査公が宿を案内して呉れるさうだから安心したまへ。』

と言はれて初めて彼の男の頼才に服した。

やがて查公は先きに立つて、我等二人を導きつゝ、最前我等の尋ねた旅人宿へ案内した。我等を前に待たせて、查公一人家に入つて、何やら番頭と談判して居たが、やがて手招きして予等と呼ぶに、二人はすう／＼しく押し入つた。

「何うでした、談判は纏まりましたか。」

「それは彼の男の言葉で。」

「話はずきましたから安心してお宿りなさい、と親切に言つて呉るゝに、予等は幾度かその厚意を謝して、查公に別れて店先きに腰かければ、番頭へんな顔して見詰めて居る、何だ、この番頭、先きは室が塞がつて居ると言つたじやないか、と言ひたさうな顔して居るのは彼の男で。」

間もなく女中が盥を持ち來つたので、予等は足を洗ひながら、女中の後に隨いて案内さるゝ室に打ち通れば、表の見かけに似合はぬ薄汚ない室、何だ、何處までも侮辱し

て居やがるとは、二人の腹の中。

「オイ、姉さん、もつと好い室はないのか。」

と彼の男は遠慮もなく叱り付けるに。

何だ、そんな風采をして贅澤なことを言つて、と言はぬばかりに濟ました顔で。

「お氣の毒様、室は之れ限りで。」

と愛想のない返辭。

「そうか、そんなら之で好い、早く飯を持つて來て呉れ。」

と彼の男は何處までも横柄。

女中は碌々返辭もせず下つてしまつた。

「何處までも侮辱して居るね、失敬な。」

「仕方がないさ、まアそれでも宿が出來たから満足をしやうじやないか。」

「それはそうでも餘り無禮だからよ、こんな冷遇する家は僕等も少つと苛めてやらう

「じやないか。」

「い、い、い、でも苛めようがないじやないか。」

「なアに、何か考へたらあるだらう、まア明日發つときまで考へてやらうよ。」

この男中々の疝癪持ちで、磊々子一流の人物かと思へば、何うやら面までも似て居るよう、それで尙更ら頼母しく。

「腹が空いたじやないか。」

「随分空いたよ。」

「何愚圖々々して居やがるんだらう。」

言ひながらパチ／＼と手を拍き出した、何だか上客のような量見で。

「へエー、と返辭はあつたが影は見えない。」

又もパチ／＼と拍く、が、矢張り返辭のみだ、而も遠くで。

「癪に障るな、時に君は酒を飲むかい。」

「酒と來たら眼がない位よ。」

「そうか、それは頼母しいね、早速やらうじやないか。」

「ウム、やりたいのは山々だが、實は僕の懷中甚だ淋しいからな、餘す所は僅に一

枚ばかり、之でもつて今夜の勘定を拂つて、明日の夜まで凌がうといふのだから

な。」

「なアに心配しなくも好いよ、僕の處にあるから。」

「でも氣の毒だからな、たつた今逢つたばかりの君に。」

「なアに書生に遠慮が入るもんか、僕は又松本まで往けば友人が居るのだから。」

と談話半ばへ、女中は膳を運んで來た。

「オイ姉さん、お銚子を一本つけて來てくれ、大急ぎで。」

烟草を吹すやら雑談に時を移して居るやらして、漸く銚子が來た。

お酌でもして呉れるかと思へば、銚子を置いたまゝ女中は遁げるように隠れて了つた。

「ハ、ハ、ハ、飽まで冷遇じやがるな。」
「なアに彼んな奴は却つて居ない方が好いよ、邪魔でなくつて。」
「それもそうだよ。」

彼れ差し予飲み、予差し彼飲み、献酬互に劣らず傾けつゝあれば、酔は早くも全身に廻つて、愉快は言ふばかりもない、彼も中々の豪酒と見えて、左までに酔いもしいが、氣焔は甚だ熾んで。

一本を傾け二本を倒し、三本四本と飲むにつれ、酔は益々發し、氣焔は益々熾に、或は旅行の趣味を談するやら、或は政治を論ずるやら、或は文學を語るやら或は馬鹿断をするやら、傍若無人の快談壯語は、定めて隣室の客や下女番頭どもを驚かしたであらう、それで予等は益々得意に益々熾に、旅人宿も飛んだお客が舞ひ込んだものごころばしても居ようが、何がさて巡査といふ確かな證人が附いて居るので、此方は益々元氣好く、相不變痛飲壯語に夜を更かして。

二人とも早や充分飲んだので、酒はもう澤山、之から飯にしようじやないか。

と彼の男の發議に、酒さへ飲めば飯は欲しくないのが予の癖で、飯はもう食へないよと辭退しても、彼の男は中々に承知せず、なアに食へないことがあるもんか、食へなくとも食ひたまへ、一番敵取りにウンとバクツいて困らしてやらうじやないかといふ、餘り欲しくはないが、そんなら一番困らしてやらうよ、と相談を極めて、帶を緩めながら大に食ふべく用意して、女中の來るのを待つて居た。

女中は中々來ない、先程から餘り手を拍くので、煩さく思つてづるけて居るのもあらう、が、實は女中の來ない方が此方には好いので、成るべく時刻を移して、酔の覺めかゝつた所で大に食ふといふ策略なので、女中の來ないのを幸ひ、手も拍かずに待つて居た。

一時間ばかり待つても更らに來ない、酔はそろ／＼醒めかゝつたものゝ、今度は眠氣が催して來たので、大事を果さぬ中に眠つて了つては大變と、二人又々勇氣を奮ひ起

して、いざとて手を拍けば、女中は漸くやつて来た。
 膳を引き寄せて、残肴を漁りつゝ食ひ初めたが、その勢ひは恰も餓虎の群羊を漁るがごとくで、女中は眼を圓くして見て居る。
 予代へれば彼れ又代へ、彼代へれば予又代へ、代りくりに杯を重ねて居るので、女中は殆んど手を休めるの暇もないほど。
 或は湯をかけ、或は茶をかけ、重ねて、何時しか一升入りのお櫃に半ば以上の飯を平らげてしまつた、流石に予は満腹して、この上一杯の飯も覺束なきに、彼は未だ飽までも貪り食ふの勢ひ、やがて最後の一碗を食ひつくして、又もお代りを命ずるに、女中は呆れた顔して、もう御座りませんといふ。
 『何だ、もう飯がないつて、宿屋に飯のないといふことがあるものか、なければ代りを炊いて持つて来い。』
 と酔眼を見張つて睨みつくるに、女中は慌てゝ引き下つてしまつた。

『ハ、、、何うだ、随分食つたよ、君は何杯食つたか。』
 『僕か、僕は五六杯食つたぞらう。』
 『何んだそれッばかりか、もつと我慢して食ひたまへ、僕でさへもう六七杯は食つて居るぞ、ハ、、、だが随分満腹になつたわい。』
 と便々たる腹を撫して居る所へ、今度は倍もあるかと思ふほどの大きな飯櫃を抱えて来た、多分意地になつたのでもあらう。
 いざとて予も又一碗を喫したが、もうこの上は一粒も咽喉を通りそうもない、彼は更らに一碗を平らげたが、流石に弱つたと見えて、箸廻しが餘程鈍つて来た、漸く一碗を喫了つて、やがて箸を置かんとすれば、もうお止しなさるのですか、と女中の皮肉な言葉に、彼れ忽ち瘦せ我慢を起して、ウム、もう一杯ッ。
 もう一杯、と、無理に出しは出したものゝ、先生流石に弱つて、箸もつけずに眺めて居る、その苦しうな弱つたやうな様子と言つたら、傍で見てる予は思はずも吹き

出さざるを得なかつた、が、彼は遂に満身の勇氣を奮ひ起して、水をかけ茶をかけなごとして、眼をつぶりながら何うやら平げ了つた。
何うだ、恐れ入つたらう、と言ひたげな顔で女中を見やれば、もうそれツ限りですか、餘りお輕うござりますね、と益々皮肉をいふ、が、何と言はれてもこの上何うにもこうにも仕方はなく、閉口々々、と頭を掻きながらごろりと横になれば、女中はホ、と冷笑して彼方に去つた。

「ハ、、、随分馬鹿な真似をしたじやないか。」

「なアにこんなことは時々やるが好いさ。」

「ハ、、、でも随分苦しいわい。」

「君よりも僕の方が餘程苦しいよ。」

「何杯食つたかえ。」

「何杯食つたか分らないが、何うしたツて八九杯は食たな、稍々もすると十杯位はや

つたかも知れないよ、この通り腹が割けさうだから。」

「ハ、、、誰も頼みもしないにな。」

「ハ、、、女中奴驚いたらう。」

「勿論驚いたらうよ。」

「兎に角愉快だな、之でやつと復讐をしたやうな氣がするよ。」

「さうさ、之で勘辨してやるさ。」

「だが苦しいや。」

「僕もよ。」

轉々唸つて居る所へ、女中がやつて來て床を伸べようといふ、何分宜しく、と動くのも太儀な位。

床の上に横はるが否、酔と満腹とに暫し轉々して居たが、それでも何時とは知らずに。

六 炎天の苦痛、山川の風景、川原の晝寝、茶店の
休息、道連れの別れ、別盃、離別、酔歩の緩慢
疲勞と空腹、夜道、友人訪問、別後の痛飲

夜の更けるまで痛飲して、お負けに腹の割けるほどの馬鹿食ひをして、それで寝たの
だもの、何うして満足な夢が結ばれよう、苦しい夢や悲しい夢に襲はれて、覺めては
眠り、眠ては覺め、終宵轉々して、漸く眼の覺めた頃には、早や枕元が赫々と照つて
居た。

「オイ君、もう起きたのかい、早いなア。」

と彼の男も寝ぼけ眼を擦りつゝ起き上つた、顔を洗ひ茶などを飲みつゝある間に、女
中は早や膳を運んで来た、膳には對つたものゝ、昨夕の満腹が未だ今朝になつても治
まらず、常ならば慌てゝ箸を取らうものを、今朝だけは箸取る勇氣もなく、膳を見詰

めたまゝ控えて居れば、彼の男は早や箸を取り上げてバックキ初めたので、その豪食
には思はずも呆れたのだが、後刻空腹になつても詰らぬ譯と、進みもせぬに一椀を喫
して、お代りと女中の出す盆を突き退けて箸を下せば、もう止したのか、意氣地がな
いね、と彼は又もお代りをして三椀までも平らげたので、喫驚したのは予のみではな
く、女中は殊更その健啖に喫驚して居る。

朝飯も終つたので、勘定を拂つて仕度に取りかゝれば、もうお立ちですかといふ、何
うも飛んだ御厄介になりました、と笑ひながら店へ出れば、番頭初め店のもの悉く
予等を訝しげに、見詰めて居る、多分子等の我儘なるを面憎く思つて居るのもあら
う。

草鞋を穿き鷹を荷ひ、笠を被つて表へ出れば、番頭未だ予等の後ろ影を見送つて居る。
町外れへ出て漸く一息して。

「何うだ、昨夕は面白かつたじゃないか、あんなことばかりあらうもんなら、旅行は

「年が年中して居つても好いね。」

「そうだて、兎に角痛快だつたよ。」

「番頭奴少々持て餘したらうな。」

「それよりか女中が持て餘したらうと思つてな、今思へば少つと可愛そうだったよ。」

「なアに可愛そうなことがあるもんか、彼んな宿屋は大に苛めてやると好いさ、まだ復讐が足りなかつたよ。」

「併し随分飲んだな。」

「可なり飲んだね。」

「僕は未だ何だか頭が痛いやうだよ。」

「僕もさ。」

「君のは頭より腹が痛いんだらう。」

「ハ、ハ、随分食つたからな。」

「今朝だつて三杯も食ふんだもの。」

「なアに食ひたくはなかつたんだけど、餘り癢に障るからな、一杯でも餘計に食つて損をさしてやらうと思つたからよ。」

「ハ、ハ、飛んだお客様だ。」

「なぞ冗談言ひながらぶらり〜と歩みつゝあれば、何時しか坂城の町の姿は消えて、名も知れぬ小さな村へ出た、昨夕の曇りは名残なく晴れて、空は澄んで居るが風もなければ木蔭もなく、お負けに太陽はぢり〜と照りつけて、暑さは堪へがたく甚はだしい所へ、村の養蠶場から漏れて来る蠶の香はひは異なる臭氣を發して、頭が岑々すれば嘔吐さへ催さうである、早く通り抜けんとすれども生憎く長い村で、戸毎の二階からは、娘や若衆やらが、切りに予等を見て嘲笑して居る、暑さは暑し、咽喉は乾き、何處か井戸のある家はないものかと、彼方此方を見廻しても、憎くや眼の當る所に井戸らしきものもなく、渴を忍び暑さを堪へ、漸く村を外れて二三町も進めば、ふ

と耳に入る涼々の聲、オイ、川じやないか、と二人の口から一様に歎聲が漏れた。

『そうだ、川だよ。』

『川端へ往つて休んで往かうじやないか。』

『好からう。』

と忽ち同意して、畑を横り小徑を辿れば、間もなく堤へ出た。

堤へ登れば、千曲川の激流は奔湍として物凄く流れて居る、川幅は左まで廣くはなけれど河原は遠く數十間の長きに亘つて、その盡くる所は田、田の盡くる所は山と、山川共に好く配合されて、景色らしき所は信州へ入つて之が初めて。

『何うだ、好い景色じやないか。』

『好いなア。』

『この川が千曲川だらう。』

『そうか知らんが、昨日まではこんな川は見なかつたじやないか。』

『それは未だ川のある所へ出なかつたからだよ。』

『ハ、ハ、ハ、そうか、兎に角好い景色だな。』

『信州の山野は敢て奇抜ではないが、何となく壮大で勇まげだな。』

『僕もそう思つて居たのよ、上州なども好いが、何となく狭く狭く壮大といふ所がな』

『いからな。』

『さうだて。』

など切りに風景の品評をしながら、やがて河原へ下りて淺瀬に身體を洗ひ、水を飲み息を休めて、暫く苦痛を忘れて居た。

如何程休んでも我から立たうといふものなく、呑氣に氣樂に、横になつたり起きて見たり、さんく休んだのだが、もうこうなつては中々立たうといふ勇氣もなく、まア

緩りして往かうじやないか、好からう、と横になつて何時の間にか眠つて了つた、昨夜の疲れで。

頭の熱いのに眼を覺ませば、太陽は早や木蔭を離れて、横合から遠慮もなく照りつけて居る、彼の男は未だ中々起きさうもなく、雷のやうな鼾の音を立て、大の字なりに眠て居る、その氣樂さ香氣さ加減と言つたら。
漸くたゞき起して、いざとて促せば、溢々起き上つて。

『もう何時かな。』

『餘り早くもないぞ、今朝起きたのが遅かつたから。』

『さうだな、未だ二里とは歩くまいなア。』

『二里なんか歩くもんか、未だようやく一里位しか歩くまいよ。』

『ハ、ハ、さうか、そんなら今日は迎ても長野までは覺束ないな。』

『なアに之から休まずに歩けば譯はないよ。』

『さうか、そんなら急いで往かうよ。』

と、川原を出て、又も本街道へ戻つて、只管に途を急いだ。

屋代へ着いたのは午後一時頃、腹が空いたればとて、茶店へ飛び込んで、したゞか飯を詰め込み、茶を飲みなごして、茶屋の婆さんを相手にそろゝ談話を持ち出した。

『今日は天氣は大丈夫だらうね。』

實はこの時又も空模様がへんてこになつたのだから。

『今日は大丈夫で御座りますよ。』

『晩までは保つたらうね、夕方まで降らんければ好いものだから。』

『大丈夫で御座りますよ。』

『長野まではもう何里位あるのかね。』

『之から五里といつて居ますね。』

『さうか、五里なら近いな、何うだらう婆さん、晩までに長野まで往かれようか。』

『譯はありませんとも、貴所方の足ですもの。』

『さうかな、そんなら安心だが。』

「長野へお出になるのですか。」

「この人は長野へ往くのだがね、僕は何うしようかと思つて考へて居る所さ。」

「オイ、君、君は長野へ来ないのかね。」

「そこだて、何うしようかと思つて居るのさ、オイ婆さん、松本までは何里位あるね。」

「松本なら大變で御座りますよ、未だ十里の先きもありまじようか。」

「オヤ、そんなら大變だわい。」

「貴所は上田の方から来たんじゃないのですかね。」

「上田の方から来たのさ。」

「そんなら上田の方から往けば大變近いのですに、此處まで来る中にはもう松本の近邊へ往つて居ますよ。」

「そうかね、それは少つとも知らなかつたよ、そんなら松代までは何れ位あるかね。」

「松代なら近う御座りますよ、之から四里位しかありません。」

「そうかそれは難有いな、そんなら松代へ往くことしようか。」

「君は松代に知己でもあるのかい。」

「あるよ、松本へ先き往かうと思つたが、茲まで来れば松代へ往つて見ようよ。」

「でも長野へ来たなら何うだね、長野には僕の友人も居るから。」

「長野へ往つても格別面白いこともないだらう、それよりか長野へ往く中に松代へ往かれるからな。」

「それはそうでもさ、松代に格別用事もないなら長野へ来たまへ、殊によれば長野から又君と諸共に往つても好いから。」

「さうさな、まあ兎も角松代へ往かうよ、長野から引き返して往くのも詰まらんからな。」

「用があるのかい。」

「用といふ程のことでもないが、先方で待つて居るかも知れんから。」

『そうか、そんなら此處から別れるのかね。』

『オイ婆さん、長野へ往くのと松代へ往くとは、茲で別れるのかね。』

『ハイ、長野は左へ往くので、松代は之から右へ往くので御座りますよ。』

『そうか、そんなら茲でお別れだね。』

『そうか、何だか名残りが惜いなア。』

『なアに又其中に逢ふよ。』

『君は何時頃東京へ歸るんだね。』

『そう、長野に十日ばかりも居るつもりだが、君は何時頃歸るかね。』

『僕はもう一ヶ月位はかゝるだらうよ。松本へ往つたり、或は越後の方へ入つて見る

かも知れんから。』

『そうか、そんなら何れ東京で逢ふよ。』

『そういふことにして、兎に角之でお別れだから、茲で別盃を擧げるとさやうぢやな

いか。』

『それも好いな。』

と相談茲に決して、何れ東京で再會せんと、名刺を取り交して、さらば之より別れの盃を汲まんと、酒肴を命じて、尙ほ雑談に耽つて居た。

間もなく酒は出で肴は出で、互に大酒家と來て居るので、二三度も取り遣りする中

は早や一本の徳利は倒れて、早や二人とも、洵然として酔つてしまつた。

何時まで居ても名残りはつきず、殊には愚圖々々して居れば日が暮れて了ひさうなので、名残り惜しくも此邊で切り上げんものと、そろ／＼仕度に取りかゝれば、先生早や餘程酩酊して。

『なアにそんなに急がなくとも好いぢやないか、日が永いから大丈夫よ。』

「だッてもう五里もあるよ。」

「五里位は譯はないよ、急げば明るい中に往つて了ふよ。」
無理に引き止められるのでそんならといふので又も杯盤を改めて。

更らに一本を倒し二本を倒し、献酬興更らに新たになつたが、この分では何時まで居たさて果しがつかず、時計を見れば早や三時に垂んとして居る。

「オイ君、もう三時だよ。」

「なアに大丈夫よ、三時でも四時でも、まさか夜道の出来ないこともあるまい。」

「夜道なんざア屁でもないがな、空模様が何だか怪しいからな。」

「そうだな、降つちやア少々困るな。」

「だから大概にして切り上げようじゃないか。」

「さうさな、そんなら出立するごしようか。」

「そうしようよ、降られちやア困るから。」

「好し、そんなら出立するとすべえよ。」

「オイ婆さん、勘定は如何程だえ。」

「ハイ、難有う御座ります、もうお立ちですか、お粗末様で。」

「大丈夫だらうな、雨はさ。」

「大丈夫で御座りますよ、暗くなるまでは。」

「そうか、そんなら難有いが。」

と、勘定を済ませて、仕度を仕直し、婆さんに道を聞いて、表へ出れば早や夕暮れがよつて居る。

町外れまで諸共に連立つて、さらばいよく茲で別れんど。

「そんなら君茲で別れよう。」

「そうか、そんなら何れ東京で逢はふよ。」

「早く往きたまへ。」

「君も達者で。」

「左様なら。」

「左様なら。」

右と左へ別れたが、何だか名残が惜く、互に見返りく、果ては聲まで掛け合つて。

「オーイ。」

「オーイ。」

その聲が次第に薄れ往くと共に、その影も又次第に遠く少さく。

今までは元氣好く語り合つて、更らに寂寞を感じなかつたのだが、一人となつては今

更のごとく寂しく、ステッキを便りにぶらりく。

急がんとして足を早めても、酔つて居るので思ふやうには運ばず、ぶらりくといひ

つゝあれば、空模様は益々へんでこなので、氣は徒らに急いても矢張り足が。

篠の井へ来た頃には五時過ぎでもあらう、太陽こそ出て居るが、西の空は薄ぼんやり

と明るくなつて、山の巔は恰度夜明けのごとくに白んで居る、曇つた夕暮れの景色は又格別。

篠の井からは未だ三里もあるといふに、痛くも失望したが、と言つて歩かねば日が暮れる、日が暮れれば歩くに不自由、宿るにも金はなし、否でも應でも歩かねばならず、仕方なく又もてくく。

先生はもう何の邊まで往つたか知らん、あんなに酔つて居たのだから、まさか僕はごは歩くまいが、日の暮れぬ中に往かれるか知ら、それにしても面白い男、面白いと言へば何うやら磊々子に似て居るやう、磊々子と言へば何うして居るか知ら、相不變漂々子浪々子と馬鹿噺でもして居るだらう、あゝ昨夕のやうな痛快なことを見せたら、定めて飛び上つて喜ぶだらうが、惜いかなこの行には居ないのだから仕方はなしさ、歸つて大に我黨を羨ましてやるかな。

なごき切りに空想をるがいて、四邊の薄暗くなるもの忘れて、茫然辿りつゝあれば、

途は存外捗りつて、之からも二里足らずのこと。
茲まで来ればもう大丈夫、暗くなつても二里位なら譯はなしと、聊か元氣を回復して、
尙ほも急ぎつゝあれば、幸ひ雨も降らず、四邊も未だ薄明るいので、せめてはこの間
に歩かれるだけ歩かんものと、一里ばかりも全速力で急げば、早や日は全く暮れて、
路傍の草木も分らぬ程の暗。

が、もう僅か一里ばかりと聞いて、暗からうが遅くならうが、一向無頓着に、ぶらり
くゞと暗を探りつゝ進めば、一時間の後には早く長野の町が眼の前に。

方々の瓦斯や電氣が眩きばかりに輝き渡つて居るので、もう何んな災難が生じても大
丈夫と、氣を弛めれば遽かに疲れが出て、足は宛がら重石をくゞり付られたよう。

漸く長野の町へ入れば、この時正に九時、停車場に一休みして身繕ひをなすステッキ
を便りに疲れた足を引きすりくゞ、町々を練り歩けば、行人悉く眼を聳て予を見送
つて居る、訪ぬる友人の町を聞けば、未だ六七町もあるといふ、足は疲れて居る、腹

は空いて居る、勇氣は阻喪して、この上の一町が常の二三里にも當れど、まさか車に
乗つて行く譯にも往かず、仕方なく匍ふようにして漸く友人の家へ辿り着けば、この時
恰度十時で。

門口から友人の名を怒鳴れば、早くもそれを聞きつけて、洋燈を手にしながら自身で
迎へ出られた。

『やあ失敬。』

『何うしてこんなに遅く来たのだ。』

『何うしてと言つたつて遅くなつたから仕方がないさ。』

『でもこんなに遅いのはだから、今日は来ないだらうと思つて居たよ。』

『でも来たから不思議さ。』

『まあ兎も角上りたまへ、そんな所に腰かけて居すとも。』

『だつて水を呉れないじゃないか。』

「ア、そうか。」
と友人自身で水を持つて来て呉れる親切に、やア恐縮々々。
足を洗つて座敷へ上れば、友人はまあ酒を飲まうといふ。
「酒も結構だが、それより先に飯を一杯呉れたまへ、腹が空いて眼を廻して来たのだから。」

「ハ、さうか、君は何時でもそんな旅行をして居るな。」
「まあ何でも好いから早く呉れたまへ、もう饒舌れないから。」
漸く飯にあり付いて、矢庭に二三杯を挿ッ込めば、何うやら人心地がして。
それより更らに酒の御馳走、盡きぬ談話に夜と共に語り明して。

七 奥羽旅行、大枚の旅費、出立の期節、猪苗代湖

畔、茶店の休息、談話、女と道連れ、苦勞話、
投宿、女のお蔭、熱海の温泉、隣室の談話、竊
み聞き、駈け落者

郷里を發つたのは八月の末、旅費は不足、お負けに途中で柄にもない贅澤をしたので、
半途から一文なごとなつて、野に伏し山に寝ね、乞食のやうな旅をして、漸く若松の
親戚へ着いた時は、恰度九月の初め、朝夕うす寒い頃であつた。
親戚の許に半月の餘も滞在していよく、出立といふ時、五圓といふ旅費を頂戴した
ので、さらば之より奥州旅行を試みんものと、恩賜の旅費を懐中に、暇を告げて出立
したのは、九月の末、山々は赤くなり初めて、人も羽織を重ねようといふ頃であつ
た。

若松近邊の名勝は、滞在の中に悉く探險したので、途中の風景も格別眼には止まらず、瀧澤峠を登つて、山又山の嶮道を辿りつゝ、猪苗代湖畔へ出たときは、恰度晝頃であつた。

湖畔の茶店に晝飯をしたためて、蒸氣の出るのを待ちつゝ、湖水の風景に餘念もなく見惚れて居れば、やがて發船の電鈴は激しく。

蒸氣に乗り移つて、窓から外面を眺むれば、秋の空は麗かに澄み渡つて、さながら鏡のごとく、一片の翳雲だも止めない、山々は清く氣高く、青や赤の化粧を施して、恰

かも晝に書いたごとく、湖水は深碧なる色を湛へて、漣は白く銀波を散らし、湖面を渡る風は冷かに秋風を誘ふて、顔や袂にそよよと吹く心地は、實に登仙羽化の思ひ

あらしむるのである、何時見ても飽きず爽かに壯快なるは、この湖水の景色で。一時間の後には對岸へ着いた、船から上つて、又徐ろに頭を廻らせば、山や湖水の風

色は更らに一入、予別れを惜めば、山水も又別れを惜むごとく、殊更に艶なる姿を以

つて予が足を引き止めるのである。

惜しき袂を分つて、山縣を後に前程に進めば、途は坦々として砥のごとく、右左に連

る山々は悉く青や紅の衣裳を着けて、華美な姿で屹然として居る、秋の旅行は又

格別で。三時頃には中山といふ所に着いた、懷中には五圓といふ大枚の金はあり、何時にもな

き贅澤な旅行の出来ることなれば、茶店へ入つて一杯を傾ける位は何でもなきことゝ、

足の疲れたを幸ひ、茶店に飛び込んで、婆さん、お酒はあるかね。予の入るに先だつて、其處には早や一人の旅人が腰かけて居た、四十五六ばかりの田

舎ものらしい女で、が、何處となく有福さうな。椽臺の片隅に座を下して、酒の來るのを待つて居れば、彼の女は早や言葉をかけて、

何方へお出になりませうかね。田舎ものに似合はぬ言葉使の優しさ、全體何物か知ら、とつくつゝ見やれば、上も下

もお躑かひこづくめの柔やわらかもの、脚絆きんはんまでが甲斐絹かひきと来て居る、瀛車きんしゃがないなら兎とも角、今
はこの邊へんにも便利べんりのものが出来て居るに、草鞋脚絆わらじきんはんの旅装いさだちとは少ちと受取うけとれぬ話はなしなれ
ど、之これも矢ッ張り田舎いなかものゝことかと獨合點ひとりがてんして。

「予わたしですかね、予は何處どこと言いつて極きままつて居ゐないが、まアぶらく奥州あづちうの方ほうへでも往い
つて見みやうかと思おもつて。」

「そうですかい、それは面白おもしろう御座ござりませうね。」

「この女中おんななか々のお世辭せせもの。」

「なアに面白おもしろくもないがね、旅行たびは病氣びやうきのやうに癖くせになつて居ゐるのだから。」

「何方どこからお出いでになつたのですか。」

「今日は若松わかまつから。」

「お國くには。」

「國くにですかね、國くにと言いへばまア東京とうきやうの方ほうが早はやいね。」

「東京とうきやうのお方かたで。」

「まアそんなもんで。」

「それで御座ござりますか。」

と懐なつかしさうな眼めで予わたしの風采ふうさいを上うへから下したまで見み上げ見み下くだして。

「矢ッ張り學校がくとうに入はいつて居ゐるのですか。」

「なアに學校がくとうなんざア疾とくに止やめて居ゐますは。」

「へエ……尙なほも予わたしが身邊みへから眼めを放はなさない

怪あやしな女おんな、全體ぜんたい何者なにものだらう、否いな々身みの上うへなんぞを詮索せんさくして、之これが年寄としよりだから好よいよ

うなものゝ、若わかいものなら面喰めんくらふのだが、なごゝあられもない空想くうきやうを起おこした。

「お母おつかさん、お前まへさんは何處どこへ往いくのですね。」

「妾わたしですかね、妾わたしは之これから三春はつはるまで歸かへるんで御座ござりますよ。」

「何方どこから来たね。」

「と今度は反對に。」

「妾も矢張り若松の方から来たので御座りますよ。」

「さうかね。」

「なと言つて居る中に漸く酒は来た、肴はと聞けば。」

「何にも御座りませぬえ、鶏卵の沸煮たのばかりで。」

「さうか、それじゃア仕方がないな、肴がなくツちやア飲めやしないんだが、と小言を言ふものゝ、酒さへあれば何にも入らぬが、平生の癖、酒は悪いが止されもせず、小言を言ひながら何時の間にか三本を倒して。」

「最前より予が飲みつくある姿を眼も放さずに眺めて居た彼の女は、この時又も言葉をかけて。」

「お酒は旨う御座りますかね。」

「不思議げな顔。」

「まア旨いから飲むやうなもんだね、好きなれば止されもせず。」

「身體が害まんかね、そんなに飲んで。」

「この女餘計な世話を焼くとは思つたが、まさか怒られもせず。」

「それは少とは悪くなるね。」

「さうでしようね、東京の人は皆お酒が好きなんでしようか。」

「何うしてかね。」

「だつて妾の悴なども東京へ往つてから大變にお酒が好きになつたので御座りますか。」

「さてはこの女悴を持つた爲めに、用もよい予を捕まへて詮議立てをするのかと。」

「そんならお前さんの悴は東京へ往つて居るのかね。」

「ハア、さうで御座りますよ、恰度貴所位な。」

「學校へでも往つて居るのかね。」

『さうで御座りますよ、もう四五年も彼方に居りますが……』

と子を見て感慨に堪へざらんものごとく、懐じさうに子を見ては種々な問を發するに、話を聞けば不思議でも何んでもなく、問はるゝがまゝに一々應答して居たが、何時まで経つても際限がないので、そろ／＼仕度して立ちかゝれば。

『もうお立ちですかね、そんなら妾も往きましよう、道連れが出来て恰度好いから。』と彼の女も仕度して立ちかゝるに、さらば諸共に打ち連れ往かんものと、勘定を済まして茶店を出た。

常ならば女の足のもごかしくて到底道連れにはならないのだが、今日は少し酔つて居るので、足の運びは極めて遅く、稍々もすれば女よりも後れさう。

『又東京へお歸りなさるのですかね。』
『さうですよ、東京が家のやうなもんだから。』

『貴所も矢張り學校に居たんでしやう。』

『それは居ましたとも。』

『何せ止したんですね、それともさう卒業したのですかね。』

『なアに卒業などはしないが、學校なんてえ話らんからね。』

『へエー』と怪訝な顔。

『家の忤なんぞも最早四五年も居るけれど、未だ卒業もしないんですからね、何時になつたら卒業が出来るんだやら。』

『すると今學校に居るんだね。』

『さうで御座りますよ、この月の初めまでは家に歸つて居りましたが、學校が初まるからと言つて又往きました。』

『何處の學校に居るのかね。』

『何處の學校か知りませんが、何でも醫者になるからと言つてますが、何時になつたら醫者になれるかと思つて心配だね。』

『そうかね、なアにその中には醫者になるだらうさ。』
『中々お金がかよりましてね。』
『如何程づゝ送つて居るね。』

『月々二十圓づゝ送つて居ますが、その外にやれ書物だとかやれ身體が悪いとか言つて、何うしても二十五六圓づゝはかかりますからね、中々大概なことでは御座りませんよ。』

『二十五六圓づゝでは中々容易でないね。』

『中々容易では御座りませんよ。』

『今の書生は中々金を費ふからね。』

『皆そんなに二十圓も三十圓もかゝるのでしようか。』

『なアにそんなにかゝるもんかね、儉約すれば十圓でも十五圓でもやれるからね。』

『だつて家の忤なんぞは何うしても二十圓も三十圓もかゝるので御座りますもの。』

『なアにそんなに要るもんかね、後は皆飲んだり食つたりさ。』

『でも家の忤などは儉約で御座りますからね。』

『近頃の書生は中々そんなものではありませんよ、やれ書物を買ふとか身體が悪いとか言つて、父親や母親を胡魔化すからね。』

『人は何うか知りませんが、家の忤は正直で御座りますからね、中々無益な金は費ひませんよ。』

と、この女甚だ子供に甘いとは知つたが、みすく子供に欺されて居るのをそれと素ツぱ抜く譯にも往かず、そうかね、と感心して聞いて居れば。

『そうで御座りますよ、』と何處までも辯護して居る、世の中の母親は皆こんなものかと、そゞろその親馬鹿が情けなくなる、それにしてもこんな母親を持つた子供は幸福なものど、つくづく自分に母親の無いのが身につまされて羨ましくなる。

『子供を持つと中々苦勞が絶へませんよ、病氣と言へば心を痛めるし、身體が悪いと』

言へば何うかと心配はするし、ほんに心の休まる時はありませんよ、この間歸つて来たときなども、大變瘦せて居ましたから、又東京へ往つて病氣にでもならねば好いと思ひましたね、心配でなりませんよ、ハイ。』
と我が子を思ひやつたか、はら／＼と涙さへ溢すに、あゝ之程までに親に心配をさせて、病氣や書物と偽つて金を胡魔化し、それを酒や女に注ぎ込んで居るかと思へば、遂にその悴の野郎の呑氣な面が見せてやりたく、如何程欺されても胡魔化されても、矢張りそれと信じて疑はないとは、あゝ何たる氣の毒な母親だらう、と思はずその面を見れば、心から心配して居る證據は兩の眼にあり／＼と。
飛んだ苦勞話を聞かれて、折角飲んだ酒の酔も速かに醒めてしまつて、氣は何だかめいり込んで、常の元氣もなく。
ぶらり／＼話しながら、熱海へ着いた時はもう六時過ぎであつた、懷中には金があり、暗くはなるし、足は疲れて居るし、宿るには恰度好い場所と、何うです、僕は今夜此

處へ宿るが、貴女は何うします、と言へば、彼の女も諸共に宿らうといふ、若い女ならそんなづう／＼しいことを言ふ筈もなければ、子を子供のように心得て、何かと親しくされるにはまさか斷はる譯にも往かず、そんならと言つて、一番好さそうな宿屋を見かけて入り込めば。
お宿りなさい、お早いお着きでなごう、甚だ愛想好き待遇に、之もこの女の居るお陰かと、之まで餘り宿屋に縁のない予も、この時はかりはお陰様で大威張り、その癖子の風采と言つたら、言ふまでもなく、菅笠に薦、ステッキに袴。
親子のやうに待遇れて、女中の案内で二階へ通れば、この家で尤も上室と見ゆる室、之も偏にこの女の賜と、今更この道連れがもツけの幸ひ。
座布団は出る、茶は出る、菓子は出る、暫くすれば湯に御案内しようといふ、そうかと言つて先づ彼の女に進めれば、先づ貴所からといふ、イヤ貴女から、まアそう言はんで貴所から、と互に際限もなく譲り合つて居たが、さらばお先きへ御免を被ります

と、女中に導かれて往けば、裏口から下駄を突っかけて此方へといふ、オヤ、湯はそんな遠い所にあるのかね、と訝かれば、ハイ、此處は温泉が御座りますからといふ、温泉ならこの上もなしと、喜んで随ひ往けば、やがて裏傳ひにそれらしい所へ出た。見れば二間四方ばかりの穴の、土間そのまゝの所へ湯が沸いて居るといふ甚だ不體裁な温泉、湯はと見れば、うすごんよりと濁つて、湯から下は何があるやら分らぬほどの濁湯、入れば身體が却つて汚れさう、それで男やら女やらの客が六七人も混浴して居るので、尙更入る勇氣もなく、そこへ遁げ歸れば、もう入つたかき聞くに、なアにあんな汚ない湯じや兎ても入れませんよ、と驚いて話せば、なアに温泉は皆彼んなもんですといふ、皆彼んなものは甚だ恐れ入つたが、そんなら貴女は入りますかと聞けば、入つて來まじようといふ。

彼の女の出で往つた後、予は座敷の真中に大の字になつて倒れて居れば、隣室で何やら女の嘔き聲、而も若い聲で。

何者かと耳を澄せば、男の稍々大きい聲で、函館まで往けば大丈夫だから、そんなに心配しなくも好いよ。

『流車賃だけさへあればね。』

『そうさ、流車賃は大丈夫あるから好いよ、もし足りなければ時計を賣つても何でも

好いから。』

『さうね。』

と談話は途絶えた、聲から察すれば何うしても若いものと思はれる。

何者だらう、と尙ほも耳を澄まして居れば、暫らくして。

『早く往きたいね。』

と女の聲。

『明後日は往かれるよ、』と男の返辭で。

『明日は本宮まで往くんだね。』

『そうさ、正午頃には往かれるから、それから汽車に乗つて青森まで往くのよ。』

『明日の中に青森まで往かれるの。』

『そんなに往かれるもんか、明日は精々仙臺までだな。』

『そんなら仙臺で宿るのかね。』

『それから青森までは。』

『明後日の夕方には着くだらう、それから船で函館まで往くのだから譯はないよ。』

『そうかね、何だか往かない中は心配だね、途中で捕まりでもしようものなら。』

『なアに茲まで来れば大丈夫よ。』

『さうかね。』

と談話は又途切れた。

が、予はその談話で二人の駈落者なることを知つた、知ると共に、その如何なるもの

なるかを知るべく切に見んことを欲したのだが、生憎唐紙はべつて居るし、談話聲のみ聞て姿は更らに見る由もない、その中に連の女は歸つて来たので、尙ほ更ら見るべき機会もなければ、談話聲すら聞き取ることも出来なかつた。

間もなく膳は運ばれた、晚酌に一杯と言ひたい所だが、連れの前を憚つて、兎に角今宵は止すこととした、旅へ出て知らぬ女と向ひ合つて飯を食ふなどは生れて之が初めて。

夕飯を終つて、茶を飲みながら浮世噺なぞをして居たが、隣室の客人が氣になつてならず、心は徒らにその方へのみ走つて、肝腎の連のものはそツち退けで。

連れの女は按摩を呼んで足を揉ませて居る、予は傍らに横になつて、只管隣室にのみ耳を傾けて居たが、彼等は予等の居るに遠慮してか、中々談話はしない、偶々しても聞き取れないような細い聲。

夜は可なりに変更した、按摩も去つた、室々は寂として居る、往來は按摩の笛や犬の遠

吠のみで、人一人通りもしない、宿場の夜は一種無限の味ひを有して居る。

女中に床も伸べさせて、横にはなつたものゝ、中々に眠られそうもない、連れの女は

と見れば、早や晝の疲れすやくと眠つて居る、隣室はと耳を敲てれば、寂として物

音もしない、眠たかと思れば、又ひそく。

そのひそくが一入手の心を動かすので何とかしてその密談を聞き取らんものと、態

と眠たふりで耳を澄まして居れば、暫らくして。

「旅へ出ると何だか心細いものね。」

「そうさ、初めの中は皆そんなものだよ。」

「今頃家のものは心配して居るだらうね。」

「心配して居るな。」

「お前んとこの婆血眼になつて騒いで居るだらうよ。」

「騒いで居るね、でも今頃は一生懸命で探して居るかと思ふと、餘り呑氣にも居られ

ないやうな氣がするね。」

「なアにまさかこの邊まで追つては來ないよ、お前よりは我の方が餘程心配だ。」

「そうね。」

「父親は怒つて居るかも知れないが、お母さんが心配して居ようかと思つてな。」

「それは心配して居なさるね、必然番頭衆でも探しに出して居るね。」

「探しに出したつて分るもんか。」

「でも函館へ往つたら家へ言ふてやるでしよう。」

「そうさ、我が言ふてやらなくとも、番頭が必らず言ふてやるよ、父親の野郎怒るだ

らうな、眞赤になつて。」

「それは怒りなさるともさ。」

「でも今初まつたことではないからな。」

「函館まで迎ひになご來ないだらうか。」

「なアに来るもんか、来たつて歸りやアしないや。」
夜が更けて、四邊が寂として居るので、囁き合つて居る談話も、漸くにして聞き取る
ことが出来た。
談話の様様では、田舎の財産家の息子らしく、女は何うやら藝妓らしいよう、それも
若いので。
尙ほ何やら密々語り合つて居たが、聲が小さいのと、予も早や眠くなつて夢のやうに
聞いて居たので、その後のことは明瞭と分らなかつた。

八 出立、茶店の休息、偶然の邂逅、駈け落者ご道

連れ、異様の四人旅、馴染のお別れ、駈落ち者
のおつき合ひ、茶店の痛飲、相手の氣焔、女の
心配、飛んだ散財、酔ッ拂ひの閉口、停車場の
見送り、へんなお別れ

眼を覺ました時は早や八時頃であつた、隣室のものは早や仕度して出掛けそふな様子、
折角彼れまでの密談を聞いて、この上顔を見ないのは残念であるが、寝過した譯なれ
ば仕方もなく、何うせ同じ街道を往くのなれば、その中には追付かれるだらうと、安
心してやう／＼起き上れば、隣室のものは早や下へ下りて往つた。
顔を洗つて歸れば、座敷は奇麗に掃除がされて、膳まで列んで居る、朝飯もそこ／＼

に濟まして、悠然と構へて居る連れの女を促し立て、仕度して往來へ出れば、今日も又申分ない天氣。

昨日は少々酔つて居たので、稍々もすれば女の足にさへ遅れさうであつたが、今朝は元氣も好く氣も爽かに、お負けに他に野心があるので、連れの女の足のもごかしさと言つたら、心は徒らに前にのみ進んでも、連れがあれば置いて往く譯にも往かず、仕方なく予一人足を早めれば、連れの女も又仕方なく足を早めた。

が、女の足の、殊には年寄りと來て居るので、そのすたくと苦しさうに隨いて來る氣の毒さと言つたら。

氣の毒なことは萬々承知はして居れど、何がさて前途に大望を抱いて居ることゝて、この女の犠牲となつて、この大望を等閑に付する譯にも往かず、矢張り氣の毒とは知りつゝ足を早めた。

一里ばかり辿つても、彼等の影は更らに見えない、確かにこの街道を來た筈だが、と

遙か遠くを眺めても、それらしいものゝ影もないので、氣は益々進み、心は益々急ぐが、連れの女は早や餘程弱つたと見えて、予が後五六間も離れて居る。

罪なことゝ知れば遽かに予が心のさもささが耻かしく、昨夜の厚遇も偏にこの女の御陰と思へば、今更益々氣の毒でならず、依つて茲に野心はさらりと流して、足を緩めて彼の女の追ひ附くのを待てば、後よりとぼくと苦しさうに歩いて來る。

『何うです、疲れましたか。』

『疲れはしません、とても男の足には叶ひませんからね。』

『ハ、ハ、思はず早く歩きましたから、今度は緩り歩きますよ。』

『そうですか、お氣の毒ですね、ごうも年を寄ると思ふように歩けませんでね。』

『そうでしようとも、僕なんぞでさへ中々歩けませんからね。』

四邊の景色を眺めたり、浮世嘲をしたりして、ぶら／＼辿りつゝあれば、岩根といふへ出た。

今朝から未だ二里も歩かないのだから、予は更らに疲れもせず、この上ごんく先きへ進みたいのだが、連の女の餘りに疲れたやうな様子を見ては、氣の毒で堪らず、殊には之も自分が疲れさせたのかと思へば、尙ほ更ら氣の毒やら濟まないやらで、何うです少つと休んで往きますか、と言へば。

「そうですね、何處かその邊の茶店で休まうじやありませんか」といふ。

言葉に従つて傍らの茶店に入れば、こはそも、今まで野心を抱いて居たその男女の二人の本尊が、予等より先きにこの茶店に休んで居ようとは。

談話聲だけで姿を拜まないのだが、その風采から察すれば、てツきり昨夜の隣室のものに相違ない。

予は獨り心に喜びつゝ、それと向ひ合つて腰を下せば、二人の顔は譯もなく拜まれた、男は年の頃二十四五の小意氣な男で、頭をコスメで分けて居るのや、帯の間に時計を下げて居るのや、お負けに二重トンドを着て居る所などは、決してたゞの田舎者では

ない、先づ東京の高襟と思へば間違はない、それに言葉までか。

女は年の頃十七八でもあろう、髪を夜會に結つて、その上にリボンなどを挿して居る所は、一見女學生らしくも見えるが、仔細に觀察すれば、その裾捌きや、その衣服の着様や、その華美な衣服等は、何うしてもそれじやの上りで、先づ小都會の藝妓と見れば之も間違はないであろう、二人とも草鞋に脚絆がけて、女は痛くも疲れて居るやうな様子、若松から瀛車があるに、何せこんな酔狂な真似をして歩くんだらう、それとも人目を避けんが爲めの徒歩旅行かと、人の疝氣を頭痛に病んで居れば、男女は予の風采の異様なるに眼を止めて居たが、それでも矢ッ張り耻かしいものと見えて、多くは俯首き勝ちに顔を外らして居る。

予が觀察の誤らざるは、二人の談話によつてそれと知られた、彼等は予等の傍にあるを邪魔と見てか、早や茶代を置いてそろく立ちかけて居る、十分間も休んだであらう、茶を飲み菓子を食べなごして、眼を放さずに彼等を見てあれば、彼等はやがて予

等に會釋して出た。

『何でしようね。』

とは連れの女が、彼等の風采を怪んで發した言葉で。

『そう、何ですかね、』と予は言葉を濁せば、茶屋の婆さん傍より引き取つて。

『何うもこの近邊のものじやありませんね』といふ。

『そうだね、この近邊のものではないが、衣服だとか言葉などを聞けば、何うも東京のものでもあるやうだが。』

『そうで御座りますよ、髪結び方なんて妾等未だ見たこともありませんから。』

『そうね、何者だろう。』

『何でもは何處かの金満家のものだね。』

と婆さんは茶代の多いのにそれと察したのであらう。

『夫婦かね。』

『夫婦ではありまじねえだ、言葉の工合などは何だか變で御座りますから。』

『そんなら遁げてども来たのかね。』

『妾の眼ではまア駆け落ち者で御座りますね。』

『そう言へばそんな風もあるね。』

『てツきりそうで御座りますよ。』

『そうかね、若いからね。』

『ありがちのこつて御座りますだ。』

予は二人の談話を獨り心に笑ひながら聞きつゝあつたが、餘り後れては又見遁すこと
もあらんかと、それとなく連れの女を促して、茶代を置いて慌てゝ出た、實は一度顔
を見たのだから、格別追つかくる必要もないのだが、それでも何んだか好奇心に驅ら
れて。

茶店を出てぶら／＼と歩めば、彼等の足も遅いと見えて、間もなく追いついたのであ

る、後になり先きになり、稍々半途位も辿りつゝある中に、早くも女同志の親み易く。

『好いお天氣で御座りますね、と連れれの女が。』

『そうですね。』

『好い天氣ですね。』

と男女の二人が一緒に、男は中々世辭馴れて居る。

『何處まで、と又連れれの女が。』

『ハア、本宮まで、と先方の女が。』

『そうで御座りますかね、妾もこの方と本宮まで諸共に参りますのですが、貴女方も諸共に参りませんか。』

『そうですね、道連れが多いは結構ですから、お供をしまじやうか。』
と茲に男女異様のものが四人。

女は女同志、男は男同志、連れれの女は先方の女と後に、予は先方の男と先きに立つて。

女は女同志で何やらべちやく話して居たが、この男も中々の世辭馴れで、何やかやと話しかける、流石に高襟だと思つた。

『貴所は何方までお出になるのですか。』

『僕ですか、何處といふ目的もないが、ぶら〜と遊びながら、福島の方から米澤の方へでも往つて見ようと思つて。』

『ハア、それは結構ですよ、私なども随分旅行をやりましたが、旅行は一番愉快ですな。』

『そうですね、貴所方は何方まで。』

『私等ですか、私等は函館まで往かうかと思つて。』

『随分遠方ですな。』

『ハア、ちよつと親戚の處まで。』

この男子が何も知らないと思つて勝手な熱を吹いて居る。

『何か商用ですか。』

『商用じゃありませんが、矢張り遊びながらと言つたやうなもので。』

『それは愉快ですな。』

『なアに詰りませんけれども、して貴所は東京ですか。』

『そうです。』

『東京は何方です。』

『本郷です。』

『ハア、本郷ですか、本郷と聞けば何だか懐かしいですな。』

『貴所も東京ですか。』

『東京じゃありませんが、私も暫く本郷に居たことがありますから。』

『ハア、そうですか、矢ッ張り學校にでも。』

『そうです。』

『今はお國ですか。』

『そうです、矢ッ張り失敗して國へ歸つて居ますが、詰りませんな。』

『彼の方は貴所の妻君ですか。』

『そうですよ、人間ワイフなごを持つちや駄目ですな。』

と飽までも白ばつくて居るので、予は可笑さに堪へられないのだが、まさか笑ふ譯にも往かず、平氣を装ふて。

『そうですか、お見受け申せば新婚旅行と言つたやうな様子ですな。』

『ハ、ハ、そんなに見えますか。』

『御愉快そうですよ、ハ、ハ、ハ。』

冗談言ふやら嘲弄すやらして、何もかも忘れて話して居れば、何時しか本宮へ出た、

恰度十二時。

連れれの女は此處より暇を告げて右へ折れたが、予と彼等の二人は、兎も角盡飯をした
ふめんものど、茶店へ飛び込んで、その準備をさせた。

仕度の出来るまで種々な馬鹿噺をして居たが、女は流石に極りが悪いと見えて、男
の傍に寄りながら、始終眼を外して居る、彼の男は書生上りといふので、予が無遠慮
に饒舌れば、彼の男も昔の書生時代に立ち返つて、快活に元氣よく談笑して。
やがて膳は出来た、彼の男は口を切つて。

『貴所は酒は何うです。』

『酒ですか、飲んでも好いですな。』

『そんならお別れに一杯やらうじやありませんか。』

『好いすな。』

と、相談茲に極まつて、更らに銚子を命ずれば、女は厭な顔して男の顔を見詰めて居

る、多分知らぬ怪しな男と酒などは飲むなといふ意味であらう、が、彼の男は一向無
頓着で、見返らうともせず。

『お前は先きに飯を食ふが好いや。』

女はもちくとして箸を取り上げ兼ねて居る。

間もなく銚子は出来た、まア一杯と差すに、遠慮もせず受取つて、舌鼓を打ちながら

返盃すれば、貴所も中々やれますねといふ。

『やれます所か、酒と来ては眼もないのですよ。』

女は益々不安心な顔して予を見詰めて居る。

『そうですか、それは結構ですな、何と言つても酒が一番好いのです。』

と彼の男も中々にやりさう。

献酬早や二三本を倒せば、彼の男は益々氣焔を吐き初めた。

『貴所方などは結構ですな、そうやつて一人で自由に旅行でもして居つちやア。』

『なアに結構じやありませんが、旅行は僕の病氣ですからな。』

『イヤ結構ですよ、私等も係累でもなければ、早速貴所と諸共に往くのですか。』

女はいよ／＼不安心な顔して、早く止せば好いにといふ顔付き、従つて予の顔を怨め

しさうに見詰めて居る、予は萬々その心根を察して居るので、なアに御安心なさい、

と言つた所で先方へ通ずる譯もなく、たゞその意を眼に示して。

『何うです、もう切り上げちやア。』

『なアにまア好いじやありませんか、未だ三本しか飲まないんですもの。』

『でも貴所は瀧車に乗るのでしよう、後れては否ませんし、それに妻君も心配します

から、この邊で止しましょうよ。』

女は漸く安心して、ね、ほんとうにお止しなさいよ、後れると悪いから、と袖を引

て切りに止めて居る。

『なアに未だ早いよ、後れれば次ぎの瀧車に乗るまでのことだ。』

『何うです、貴所、干しませんか、と徳利を以つて切りに進めて居る、この男管を捲くかと思へば、何だか氣掛りで、之が爲め女に心配させるも氣の毒な譯と、辭退して切りに止めても、止れば、止めるほご進めて止まぬに、仕方なく一杯を飲み干して、もう之れ限りで止さうと言へば、彼の男は早くも怒鳴つて。

『オイ婆さん、お銚子のお代りだッ。』

女は心配する、予も又心を痛めて、こんなことなら飲むのじやなかつたが、と後悔しても追ッ附かず、仕方なくこの一本を倒さば、勘定をして立ち出でんものと、心を定めて兎に角又も一本を倒しつくした。

『さア、いよ／＼之で止さうじやないかね、そして時間も来るだらうから早く往きた

まへ、此處は僕が引き受けるから。』

『なアにまア好いよ、勘定なんか僕がするから安心して飲みたまへ。』

といよ／＼酔つていよ／＼管を捲き初めるに、女は袂を捕へて切りに止めて居る、予

も又切に止めて何うやら欺了した。

が、欺しは欺したものと、今度は中々動きそうもない。

「オイ君、餘り遅くなるぞ否けないから、兎に角往かうじやないか。」

「なアに遅くなれば宿るまでさ。」

となか／＼動かぬに、いよ／＼予から先きに立たねばならずと、それと決心して。

「オイ婆さん、勘定は如何程かね。」

「なアに勘定なんか僕が拂ふよ、と懐中を探りつゝあつたが、昨夜の談話では何うや

ら旅費にも缺乏して居るやうなので、この勘定を拂はせて旅費を無くさしては、女の

前へ對しても申譯はなしと、矢庭に勘定を投げつけてつか／＼と、往來へ出れば、彼

等も仕方なく茶店を出て。

いざとて別れんとすれば、彼の男は又も予の袂を捕へて、之から何處へ往くといふ。

「僕は之から歩くのさ、君等は之から流車に乗るんだらう。」

「それは流車に乗るのだけれども、まア早いからもう少つと休んで往きたまへ。」

「早くはないよ、君は遅くなつても好からうが、僕は遅くなると困るのだから、之で

失敬する。」

袂を振り切らうとすれども、確りと捕まへて中々離さばこそ。

「まア好いからもう一遍つき合ひたまへ、君にばかり勘定を拂はせては申譯がないか

ら。」

「なアに、申譯も糞もないから、まア兎も角流車に乗りたまへ。」

往かうとする、止めやうとする、すつたもんだと往來の真中で立ち廻りを初めれば、

行人は皆何事かと寄り集つて居る、ハラ／＼心配して居るのは女一人だ。

何處まで世話を焼かせるのか知ら、とまア兎も角仕方がないから停車場まで送り届

んものさ。

「そんならまア停車場まで往かうじやないか。」

『往くも好いが兎も角もう少し休んで往かうよ、まだ早いから。』
『早くはないよ、もう何時だと思つて居るのか。』
『まだ二時位だらう。』

『二時なら遅いじゃないか、仙臺までは往けないよ。』

『仙臺まで往けなければ福島で宿るよ。』

何と言つても聞かないので、之は何でも欺すに若かずと。

『そんなら僕も流車に乗るから諸共に往かうじゃないか。』

『そんなら君も乗るかい。』

『乗るよ。』

『眞實にか。』

『眞實ども。』

と、漸く欺して、三人連れ立つて停車場に至れば、流車は今發せんとして切りに傳鈴

を鳴らして居る。

もう出る／＼と、急ぎ立て、兎も角彼等二人の切符を女に購はせて、予は忽ち雑沓の中に姿を隠した。

彼の男は切りに予の影を尋ねつゝあつたが、早や改札口に押し出されて、驛夫と女に早く／＼と急れて、止むなく流車に乗つた、その後ろ影を見送つて、予は思はずもほ

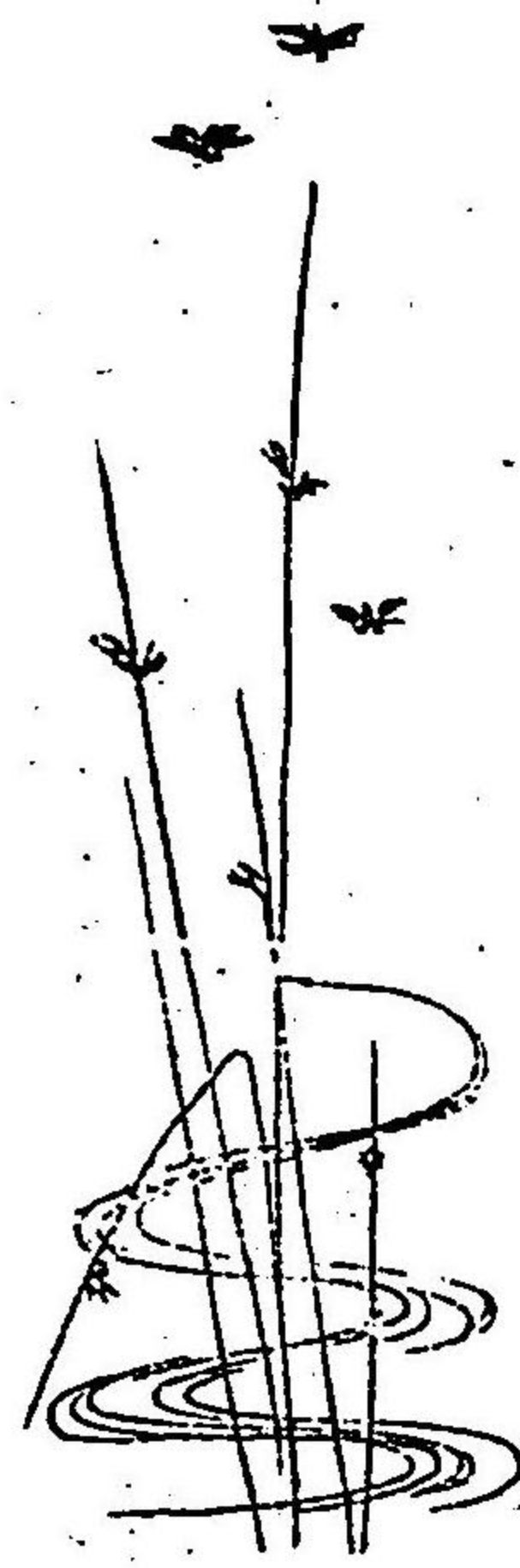
ッと一息。

流車に乗つても、彼の男は尙ほ窓から首を出して、切りに予を求めつゝあつたが、見付けられては又煩さごと、雑沓の中に姿を隠して、竊かに彼等の様子を見て居た。

流笛と共に間もなく流車は揺ぎ出した、男も女も窓から首を出して、尙ほも予を求めつゝあつたが、男は遂見付け得ずして、四邊をきよろ／＼見廻して居る、女は早くも

認めて、ハンケチを振りながら切りに合圖をして居たが、予は何だかこの瞬間異様の感に打たれた、と言ふのも、固より彼等とはたゞの一面識に過ぎないのだが、彼等の

事情を思ひやつて、そして、彼等の人物を知ると共に、そゞろ彼等の身が憐れに思はれて、能ふべくんば行末永く幸福なれかしと、心の中に祈りながら、ふと彼等を見れば、彼等の姿は早や一町も離れて、女の手に向つて切りに頭を下げて居るのが見られた。



九 爺さんご合宿、爺さんの因果話

停車場を出ればもう午後四時、日は早や西に傾いて、四邊は夕靄に包まれて居る、山や野は烟つたやうに茫乎として、秋の空の淋しさは一入。

今までは道連れの三四人もあつたので、面白可笑しく歩いて居たのだが、今度は遽かに一人となつたので、淋しいやら心細いやら、秋の野道を一人とぼくと。

本宮へ着けばもう六時、町々は早や燈火が點いて居る、之より歩いた所で、夜道なれば何程も歩けず、懐中は未だ裕かなり、何處へ宿るも同じことと、そのまゝ傍の旅人宿へ飛び込んだ。

又も例に依つて断はられるかと思へば、番頭機嫌好く迎へ入れて、何やかやと面倒を見て呉れるに、成程奥州は信州と違つて、旅人宿でも何でも人が好いわい、と感心して二階へ上れば、女中は揉み手をしながら、お氣の毒様ですが、室は残らず塞がつて

五十四 二二二 三三三 四四四 五五五 六六六 七七七 八八八 九九九 一〇一〇 一一一 一二二 一三三 一四四 一五五 一六六 一七七 一八八 一九九 二〇〇 二一一 二二二 二三三 二四四 二五五 二六六 二七七 二八八 二九九 三〇〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

居ますのですから、何うかお合宿をといふ。

快く迎へたは迎へたものゝ、お合宿では少々閉口したが、それでも断はられてまご

くするよりは優じだらうと、辛抱して案内された室へ打ち通れば、成程其處には六

十ばかりの爺さんが、早や上座に陣取つて、煙草を吹かして居る。

挨拶して座に着けば、まア何うか此方へと、席を譲るに、なアにそれには及びません、

と辭退して下座に直れば、爺さん切りに此方へ〜といふ、その言葉つきやら身のこと

なしを見れば、中々親切らしい爺さんで。

室を見廻せば、六疊の薄汚ない室で、飾りもなければ體裁も甚だ悪い、が、之も快

く宿めて呉れたことかと思へば格別不平も起らず、柔なしく小さくなつて長まつて居

れば、女中は來たつて湯に入れといふ、こんな宿屋では何うせ碌を湯でもあるまいと、

まア今日は止さうと言へば、そんなら御膳にしまじようかといふ、そうか、そんなら

早速出してお呉れ、序にお銚子を一本。

「貴所はもう飯は濟みましたか」と聞けば、居眼りして居た爺さん慌てゝ頭を擡げて。

「何ですかね。」

「飯は濟んだのですか。」

「飯ですか、飯ならもう疾くに濟みました。」

「そうですね、そんなら私に構はんで何うか御隨意に、私も御免を被つて飯を食ひま

すから。」

「ハア、何うぞ御隨意に。」

間もなく膳は來た、銚子を取り上げて爺さんに差せば、難有う御座りますが私は否け

ませんからといふ。

「そうですね、でも一杯位は往けるでしよう。」

「イヤ、酒と來たら兎ても否けないのですから。」

「そうですね、私一人でやつて居つては何だか變ですね、それでは御免被むつて。」

獨酌で傾けつゝあれば、爺さん羨まじさうに見詰めて。

『酒好き人は結構で御座りますね。』

『何せですかい。』

『だって楽しみがありますから。』

『なアに餘り楽しみもないが、ね、楽しみがないから飲むやうな譯で。』

『貴所方に楽しみがあるまいものなら、老人の私なんざア何うしまじよう。』

『なアに若いものだって餘り楽しみもありませんや。』

『なアにそんなことがあるもんですか、私等も若い中は随分面白いこともありました』

『が、もうこうなつちやア駄目ですね、後生願ひでもするより外には。』

『貴所はお幾歳ですね。』

『もう貴所六十五で御座りますよ。』

『そうですか、まだお若いです。』

『ハ、、、私が若いなら貴所方などは赤子のやうなもんだ。』

『ハ、、、そうかも知れませんか。』

『全くですよ、私等のようになつてはもう何一つとして楽しみはありませんから。』

『でも子供や孫はあるでしょう。』

『子供はありますが皆碌でなしばかりで、親の爲めになるやうな奴は一人もありません。』

『ん。』

『貴所は何方ですね。』

『私は福島ですが、今日その悴の所へ往かうと思つて來たのですけれど、餘り遅くな』

つたもんですから遂茲へ宿りました。』

『貴所の息子さんと言ふのはこの御近所ですかね。』

『ハイ、茲から三里ばかりもある田舎で御座りますよ。』

『何御商法ですね。』

「なアに詰らんもんですが……。」
と言ひ淀んで居るに、強て聞かれもせず。

「そんなら貴所は息子さんと諸共ではないのですね。」

「ハイ、私は婆アと諸共に暮らして居ますが、悴は別にこの近在へ家を持つて居ます。」

「そんなら其處へ往くんですな。」

「ハイ、往かうかと思つて出て來たのですが、又面白くもないと思へば往きたくもありません。」

「何か面白くないことでもあるのですか。」

「ハイ、何うも親不孝な奴で御座りまして、さッぱり頼み甲斐のない奴ですから困つて了ふんです。」

「息子さんは一人で暮らして居るのですかね。」

「なアに嫁もあれば子供までもあるので御座りますよ。」

「それで貴所方のことは構はないんですか。」

「まアそんなような譯で。」

と爺さん甚だ心細さうに何か呟やいて居るので、何だか自分も一人の親を持つて居るのだがと、思へば、何うやらこの爺さんの境遇が可愛想で堪らず、と言つて何うにもしてやることは出来ないのだが、それでも何だか深い譯を尋ねたくもあるので、尙ほも遠慮なしにそれや之やと尋ねれば、爺さん宛から味方でも得たごとくに喜悅して、聞きもせぬことまで饒舌り出したが、聞けば聞くほど因果な身の上。

以前は板倉の臣下で、二百石を頂戴した立派な家柄であつたのだが、徳川の瓦解と諸共に、家屋敷まで人手に渡して、たつた一人の悴を杖とも柱とも頼んで、辛苦の中に育て上げたのだが、頼りにならうといふ一人の悴はさッぱり頼りにならず、自分等夫婦は氣樂に暮らして居るのだが、海山の大神ある兩親には更に見向きもせず、仕方な

く悴の家へ轉がり込めば、嫁との折合が兎角に付かず、果ては出て往けがしの待遇に、到底居堪まりかねて、今では婆さんと二人で、別に一家を持つて、悴から月々送る少しばかりの金に依つて何うやら露命を繋いで居ること。憐れは因果話に飲んだ酒もさつぱり旨くはなく、酔もしなければこの上飲みたくもなく、常にもなく一本で止して、女中を呼んで飯にかゝつた。女中の給仕でしたゝか空腹へ詰め込めば、眼の皮は遽かに弛んで、お負けに疲れまで出て来た、もうこの上の望みは寝るばかりで。爺さんも早や眠たさうな顔をして居る、さらば諸共に休まんものと、女中に床を命じて、二人枕を別べて。枕に就けば前後も知らず。

十 早朝の出立、秋の朝景色、温泉場の變遷、へんな道連れ、駈け落ち者の詮索、駈け落ち者の身の上

翌朝眼を覺せば、常になく早起きで、四邊はまだ薄暗くなつて居る、爺さんはまだ夢の最中らしく、甕の音を立てながらぐうぐうと眠つて居る、邪魔にならぬようにそつと起き出て、顔を洗ひに下へ降りれば、下女や番頭は早や疾くに起きて居て、客人の二三は早や草鞋を穿いて居るものもある。顔を洗つて二階へ上れば、爺さんはまだ何にも知らずに眠つて居る、手を拍いて飯の催促はしたいが、爺さんの眠りを覺ますと氣の毒な譯、何うしたもの考へては見だが、別に名案も出ないので、仕方なく下へ降りて、女中に朝飯の催促をし、二階で食すれば爺さんの妨げにもならんかと、遠慮して何處か空いて居る室はないかと聞けば、

そんならと言ふので、便所の傍の四疊半へ押し込められた。

それでも仕方なく我慢して、飯もそこ〜に終つて、時計を見れば未だ五時少し過ぎ、こんな早く發つことは滅多にないが、この早起きを幸ひ、今日は一番歩かれるだけ歩いて見んものと、早々に仕度して、そんなら二階のお爺さんに宜しく頼むよ。

往來へ出ればまだ夜はハッキリと明けない、ひや〜と吹く秋風は、顔や袂を吹いて、心地好さは言ふばかりもない。

途の一里ばかりも歩めば、漸く夜は明け放れて、朝霞は野や山の凡てを蔽ひつくして居る、暫らくすると、東はそろ〜赤くなつて、見る間に旭日は東山の巔から顔を出した、その見事な景色と言つたら。

旭日がだん〜昇ると、朝霞は次第〜に消えて、青い葉や赤い葉が、その麗かな光を浴びて、恰度今しも眠りより覺めたやう、景色は更らに格別で。

空は霽れて居る、氣は暑からず寒からず、心は爽かに長閑に、恰かも前途の光明に向

つて進みつゝあるがごとく、足も自から軽く。

休みもせずに二時間も歩めば、松川といふへ出た、茲で草鞋を穿き代へて、尙ほ休みなく只管に歩めば、十二時頃には早や福島へ着いた。

停車場前の茶店に休んで、茶を飲むやら飯を食ふやらして、暫く疲れを休めて居れば、何時の間にか一時が。

さらばと仕度して立ち出たが、さて之より何れの道を取らんものかと、今になつて躊躇したが、實は仙臺にも知己友人はあり、米澤にも又知己友人はあるので、往きたいのは兩方とも往きたいのだが、まさかさうする譯にも往かず、仙臺の方は兼て故郷のごとくにして居た所なれば、此處まで来て態々往くにも當らないので、さらばまた見ぬ米澤の方を旅行せんものと、漸く思案を定めて、右に折れて米澤街道を辿つた。

一時間の後には庭坂へ着いたのだが、茲は嘗つて汽車の出来ぬ前に来たことがあるので、今は如何に變遷しつゝあることかと、村を一廻り廻れば、成程七年以前と今とで

は雲泥の差がある、人家は殖えて居る、温泉は繁昌して居る、それに多くの人が入り込んで居るので、宛然山村の小都會をなして居る、感慨は轉だ勃發して、茶店に腰を下して、茶を飲みながら四邊の變遷を眺めて居れば、この時突然後ろより。

「貴所は何方へお出になりますか、」と言葉をかけたものがある、驚いてふり返れば、最前より予の傍らに腰をかけて居た三十四五の商人らしい男で。

「僕ですか、米澤まで。」

「そうですか、私も米澤まで行くのですが、諸共に往かうじやありませんか。」

と餘り馴々しいので、少々變には思つたが、固より一人旅のことなれば、道連れのあるのは何よりのことと、早速承知して。

「そうですか、そんなら諸共に参りませう。」

「一人旅じや何うも寂しう御座りますな。」

「さうですよ、旅は道連れつて言ひますからね。」

「ハ、ハ、ハ。」

「全くで御座りますよ、貴所は今日は何方からお出になつたのですね。」

「二本松から。」

「へー、二本松からでは随分大變でしたな。」

「貴所は。」

「私は福島から。」

「そうですか、今日は何方でお宿りますか。」

「何處と言つて極めませんが、まア兎も角歩かれるだけ歩かうと思ひまして。」

「そうですか、僕も矢ッ張りそうする積りで。」

「そんなら尙ほ都合が好う御座りますね。」

「そうすな、そんならそろ／＼出掛けませうか。」

『さう致しまじよう。』
と茲に二人連れ立つて茶店を出た。

『大分冷しくなりましたなア。』

『そうですね、もう十月ですからな、殊に此方の方は尙ほ早く冷しくなるようすな。』

『それはそうですね、して貴所は何方ですね。』

『僕ですか、東京ですよ。』

『ハア、そうですね、して御商法は。』

『書生ですよ。』

『ヘエー、遊びながらの旅ですな。』

『まアそんなもんで。』

『結構ですな。』

『貴所は。』

『商法ですか、矢ッ張り商人で御座りますよ。』

『そうですね、だが貴所などの商法は尙ほ面白いですな、商法をしながらさうやつて遊んで歩けますから。』

『なアに私共の商法は歩くやうなものありませんよ。』

『そうですね、そんなら今度のは商法に出たのではないのですね。』

『そうですね、商法に出たのなら結構ですが、飛んでもない災難に逢ひましてな。』

『ヘエー、災難にですか、掏摸か盗賊にでも。』

『なアにそんなものならまだ好いですが。』

『ヘエ、そんなら何ですえ。』

『馬鹿々々しくつてお話にもならないんですよ。』

『そうですね。』

「耻を言はねば分りませんが、貴所、嬪の奴に逃げられましたな。」

「フム、お神さんに。」

「それで御座りますよ。」

「何うしてね。」

「何うしてツて貴所、間男をしたんで御座りますよ。」

「フム、そんなら男と逃げたのかね。」

「それで御座りますよ。」

「それは随分非道いね。」

「お負けに店の金までさらって往きやがったんですもの。」

「フム、」と予は思はずも面白い話を聞いたので、「好い道連と諸共になつたわい。」

腹の中に獨り喜びながら、可笑さを忍んで居れば、男は中々笑いごころではなく、心から悔しさうに眞面目になつて話して居る、嬪に逃げられるような男は何んな男だらう、

とふと顔を見れば、成程正直そうな、何處となく間の抜けた面。

「それでお前さんはお神さんの行衛を探しに出たのですかね。」

「ハイ、左様で御座りますよ。」

自分で探す位なら、警察へ出て搜索願を出せば譯はないものを、とつくぐその馬鹿らしい所置が氣の毒で。

「それで居る所が分りましたかね。」

「中々分りません。」

「そうだらうともさ、貴所が一人で探した所で、何時まで経つたとして分るもんですか、

三年経つても五年経つても。」

「そうかとも思ひましたかな。」

「そうですとも、先方は逃げるつもりで逃げたのですもの、何うして貴所の見やうなところに居るもんですか。」

『でもちよつと心當りがありましたからな。』
『心當りのある所へなどは尙ほ居りませんさ。』

『そうすな。』

『それで諦めて歸るのですか。』

『まアそんなやうなわけで。』

『ハ、ハ、ハ、それこそ骨折損の疲勞儲けですよ。』

『そうすな。』

『それよりか寧ろ警察へ出て搜索願ひを出したら好いでしよう。』

『こうなつてはそうでもするより外ありませんな。』

『全體何歳なんですわ。』

『二十五歳です。』

『未だ若いんだね。』

『浮氣者で御座りましてな。』

『男といふのは分つて居るのかね。』

『分つて居りますとも。』

『矢ッ張り若い男かね。』

『ハイ、矢ッ張り二十五六位のもので。』

『フム、まア仕方がないから搜索願ひを出すんだね。』

『まアそんなことでもして見まじよう。』

と歩き／＼話して居たのだが、男はかくても四邊に眼を配つて、若しやそれらしいものでもと、一々行人に對つて猜疑の眼を光らして居る。

その話を聞き、その苦勞を聞いては、徐ろ憐れが催されるのであるが、何だか小説にでもありさうな話なので、予は何となく異様の感に打たれて居た。

歩き／＼話して、その面白い話に耳傾むけて、身の何處にあるやら、時の何時頃であ

るやも忘れて居た。
ふと気が附いて見れば、四邊は早や夕暮れの景色に包まれて、山里の寂しさは行人とて稀で。

暗くなつて途も見えない頃、漸く飯坂へ着いた、旅宿は此處と定めて。



十一 同宿、飛んだ御馳走、二度の身の上話し

此處は庭坂と同じく温泉場を以つて名あるのだが、庭坂よりは遙かに繁華で遙に體裁も調つて居る、連れの男の先案内で、好さそうな宿屋へ入り込めば、格別怪みもせず

座敷と言つても田舎の旅店として先づ上等な方、茶道具でも座布団でも皆綺麗なので、まことに氣持も好く、湯に入つて疲れを休め、暫らくして夕飯の膳に向へば、二本の銚子が列べられてある、何うした譯かと訝ければ、連れの男が命じたとのこと。

途連れにならうが合宿をしようが、酒飲まぬ奴はまことに閉口するのだが、この男酒好きと見えて、相談もせずに銚子を命じ置くとは、此奴なか／＼話せるわい、と銚子の顔を見たのが先づ何よりも嬉しいので。

『何うです、貴所はお酒はいけるでしやう。』

『お酒と来たらもう大好物で。』

『そうですか、それは相手があつてまことに結構だ、何うか寛いで緩りやつて下さい。』

と自分が奢る氣なのであらう、自分が先づ毒味をしてそれから手に差すに、受取つて忝けなく頂戴すれば、人より奢つて貰つた酒は又格別。

『旅へ出て湯上りの晩酌と来たら何とも言へませんな。』

と舌鼓を打ちながらさも樂さうに傾けて居る、胸の煩悶も忘れて居るかのごとく。

『そうですな、何と言つても酒ですな。』

『貴所は餘程往けますかね。』

『可なりやりますな。』

『そうですか、それは結構、何うぞ緩りと飲んで下さい。』

と更に女中にお代りを命じて。

献酬早や三四本を倒したが、見れば彼の男は餘りに多くは飲まないやうな様子、予の爲めに多くの散財をかけては濟まない譯と、實は未だ飲み足りないのだが、自分が命じたのなら遠慮もなければ、先方に先きを越されて御馳走になつたやうな譯なれば、未だ飲みたいとも言はれず、仕方なく遠慮して、もう澤山ですからと辭退すれば。

『なアに緩りとやつて下さい、貴所は大分飲けさうですから。』

『イヤもう充分です。』

『なアにそんなことがあるもんですか、遠慮せずにごんごん飲んで下さい、私は貴所が飲んで下さればまことに本望ですから、と飛んでもないお世辭をいふ。』

『そんなら遠慮なしにもう一本頂戴しましうか。』

『お世辭に乗つた譯ではないが、實は全く飲みたいからで。』

『さア、何うぞ遠慮なく、それに私も今日は出来るだけおつきあひをしますから。』

『貴所は何れ位飲みますね。』

「私はそうは往けません、精々二合か三合で。」

「そうですか、そんなら私一人飲んで居るやうなもんですな。」

「なアに遠慮せずにごんく飲んで下さい、私も今日は飲めるだけ飲みますから。」

「イヤ、僕のためにおつきあひをなさるなら甚だ迷惑ですよ。」

「なアにそう言ふ譯じやありません、こんなときに酒でも飲まなければ、貴所。」

と胸中の煩悶を訴へるかのごとく、予の差す盃を一息にぐツと飲み干すに、さて

はこの男自暴酒と見えるわい、胸中の煩悶苦痛は充分察しては居れど、自暴酒の結

果に昨日のごとき飛んだ管を捲かれては、後の仕末が甚だ困難する譯と、予も早や充

分飲んだやうな顔して。

「もう充分ですから飯にしようじやありませんかと言へば。」

「なアに貴所、決して遠慮せずにごんく飲んで下さい、貴所が飲んで呉れなければ

張り合がない。」

と、女中を呼んで、更らに新に酒と肴を命ずるに、仕方なく往生して居れば、間もなく運ばれたのは實に田舎にしては山海の珍味、酒は更にあり、肴は更らに新しいと来て居るので、下地の好きな予の酒飲みとして、何で之を等閑に見て居ることが出来よう、澤山々々と言ひながら又も一本。

予も餘程酔つた、彼の男は更らに酔つて居る、もうこうなつては遠慮も糞もあつたものではなく、お負けに彼の男に煩悶を抱いて居ることとて、御馳走の代りに一番慰めてやらんものごと。

「世の中なんてねそんなにくよくよしたもんじやアありませんや、ね、間男をする奴もあれば間女をする奴もありさ、女房が間男をすれば亭主も間女をすれば好いじやないか、男早魅りもしなければ女早魅もしないからね、ハ、ハ、ハ。」

「そう言へばまアそんなものですがね、でも駆け落ちまでするといふになつては、何んぼお心好しの私でも黙つては居られないだらうじやありませんか。」

『それは言ふまでもないがね。』

『癢にも障らうじやアありませんか。』

『それは萬々察して居るがね。』

『見附けたらたゞ殺してやらうと思つて居るんですよ。』

『そんな間男をするような奴にかまつても何うなるもんかね、奇麗さツぱりと諦めてしまふが好いじやアないかね。』

『そうも思つては居るのですが、思ひ出すと腸が沸ね返るやうでね。』

『それはそうだらうともね。』

『それに貴所之までさんぐ放蕩をしましてね。』

『そんな女かね。』

『中々仕様のない奴でした。』

『そんな女なら尙ほ綺麗に諦めたが好いじやないかね。』

『そうですね、でもね。』

『何となく未練があるらしい。』

『何せそんな奴なら疾うに離縁をしなかつたんだね。』

『そこに種々事情がありましたね。』

『何んな譯かは知らないが、そんな奴なら貴所の爲めにもならないでしよう。』

『それはもう言ふまでもありません、爲めになるどころか、さんぐ之まで迷惑ばかりかけて居やがッたんで。』

『そんなものぞ知つて夫婦になつたのかね。』

『まさかあんな奴とは思はなかつたんです、所が後で後悔しましたよ。』

『顔でも好いのかね。』

『まア好い方ですね、だから尙ほ浮氣をじやアがるんですよ。』

さてはこの男面に惚れて居るので、それでまだ未練を残して居るのかと、思へば何う

やらそうらしい。

『なアにもう諦めてしまおうさ、女は何人もあるから。』

『まア諦らめるより外仕方がありませんね。』

『好し見附けて連れて歸つたとした所で、もうそんなことをしては夫婦になる譯にも往くまいが。』

『それも婢の心一つです、改めて侘でもするなら許しもこまいもんでもないのですから。』

と、飽まで未練があるかして、間男して駈け落ちまするような女を、侘れば許してやらうといふ、何處まで婢に惚いのか分りやしない、世はさまざまで。

『世の中にはそんな奴が何人もあるね。』

『そうでしようか。』

『そうともさ、だから女なんて奴は到底油断が出来ないといふのさ。』

『そうですね。』

同

この男まだ世間には馴れないと見ゆる、そうだらう、婢に駈け落ちなどをされようといふ男だから。

酒もつき、談話も絶わしたので、そんなら飯にしようといふので、やがて女中を呼んで飯を食ひ、終つて又も茶を飲み世間噺をなし、寝たのは十一時頃であつた。



十二 連れの別れ、米澤越え、山中の寂寞、坊主と

道連れ、不思議な坊主、坊主の案内、山村の寒

寺、休息、悠々の閑日月、碁合戦、寺の御馳走、

痛飲壯語、お寺の御厄介

宿屋を出たのは八時過ぎ、福島から茲まではさまで困難の道ではないが、之より米澤へ出ようといふには中々の険道のこと、さらば充分仕度をして往かんものと、麓の茶店で草鞋を穿き代へ、茶を飲みながら暫く休息してあれば、彼の男はふと思ひ出したやうに。

「貴所は矢ッ張り之から米澤へお出になるかといふ、」知れたことは思つたが。

「そうですよ、米澤へ往かうと思つて來たのですから。」

「そうですか、そんなら私は茲でお別れにしまじようといふ。」

「オヤ、貴所は米澤へ往かないのですか。」

「行くことは行くのですが少々外に用がありますから。」

「何處か寄り途でもして行くのですか。」

「ちよつと知合のところまで寄つて往かうかと思つて。」

「そうですか、例の一件ですかね、ハ、ハ、ハと笑へば。」

「さういふ譯でもありませんが。」

と、さういふ譯でもない所へ明かにさういふわけがあるので、予もそれを知つたが、彼の男の強て往かうといふのを無理に引き止める譯にも往かず。

「さうですか、そんなら茲で別れることにしまじよう。」

と暫く茶店に休息して、さらばと立ち出れば、彼の男は右へ、予は麓より峠に向つて。

山道にかゝれば、成程言はれたごとく途は漸く峻峻になつて、山は高く谿は深く、峻は峻なれどもそれだけ又周囲の景色は趣を具へて、一人旅の、飽までこの美事なる山水の景を賞ること、之が却つて自分には幸福である。

寂しい、静かな、峻しい山道を、一人悠々として辿りつゝあることの如何にそれが長閑にして愉快であるであらう、足一度俗地を離れて、この悠々たる自然の大觀に接しては、身の塵界にあることも忘れて、たゞ洵然として自然の美に酔いつゝあるのであ

る、旅行の眞味のある所は蓋し如此き所で。

一二里の峻道を上下すれば、山はいよ／＼奇に谿はいよ／＼怪に、寂寞は更らに寂寞を添へて、天地の幽玄なるは又今更のごとく。

秋の空は晴れ渡つて、山々の草木は悉く紅と變じ、風に吹かれてひらく／＼と舞ひ落る落葉は、谿に沈み途に埋まり、山や、谿や、途は、悉く落葉に山をなして、恰も毛氈を敷いたかのごとく、幽寂な氣は四邊に満ち／＼して。

がさ／＼と落葉を踏みながら、尙ほも峻道を上下しつゝあれば、遙か一二町の處に當つて、笠を背負ふた坊主の後ろ姿が見られた、この寂寞たる山中に俗縁を離れた坊主の辿りつゝあるごときは、又この幽寂なる山間の靈妙なるご配合して更らに無限の趣きがある、あゝ予れもしこの自然の美を寫すの筆があらば、と、つく／＼この幽妙なる自然を等閑に付することのそれが甚だ残念とも遺憾とも。

坊主の影は見ゆつ隠れつ彼方に動きつゝある、人なき山中の、而も道連れには持つて來いの談話相手を見付けたので、予は喜んで急ぎ足に彼の坊主の後を追ふた。

間もなく追ひ付いた、近ければ彼方は驚いて振り返つたが、予が風采の異様なるに怪訝の眼を光らして居る、予は先づ言葉をかけて。

『好い天氣ですな。』

『好い天氣だの。』

と、極めて横柄な返辭、ウンと癩には障つたものゝ、之も坊主のことなれば仕方な

こと尙ほも言葉をつづけて。

『何方までお出になるのです。』

『私かい、私は米澤まで。』

『ハア、そうですか、私も米澤まで往くのですが、諸共にお供ごまじようか。』

『そうなの、諸共に往つても好いの。』

『そうですか、そんならそう願ひまじよう。』

と坊主と思へば態と辭を低くして居るのだが、彼方は益々横柄で。』

『お前は何處から來たの。』

とお前はの言葉がウンと癢に障つたので、此奴坊主の癖に無禮な奴、先方がそつといふなら此方もその積りでと。

『僕かね、東京から。』

『何じに來たの。』

何じに來たとは餘計なお世話だが、この坊主全體何んな奴か知らん、兎も角談話して見れば分るからと。

『遊びに。』

『遊びに?』

と坊主はふり返つて又手を見たが。

『遊びとは氣樂だのう。』

『お前さんは何じに往くのですえ。』

お前さんと言つたのが坊主にも癢に障つたと見えて。

『私かの、私は用があつて。』

『そうですか。』

『お前は米澤に知己でもあるのかい。』

『そうですよ。』

『東京から此處まで来たのかえ。』

『そうですよ。』

『何時東京を出たのだえ。』

『一ヶ月ばかり前に。』

『ぶら／＼外を廻つて来たのか。』

『そうですよ、行脚ですからな。』

『すると何かわ、お前の商法は。』

『書生。』

『書生か、それは氣樂だのう。』

『まア氣樂だね。』

『で何かえ、旅は好きなのかわ。』

『旅は仕事のようにして居るのさ。』

『そうか、それは面白いのう、私なども始終旅をして居るが、して何かわ、たゞ旅をしてもぶら／＼遊んで歩くだけか。』

『まアそんなものだね。』

『それじゃア詰らんのう。』

『何せかね。』

『何せツて旅をしてもたゞ遊んで歩くだけなら詰らんじやないか。』

『此奴生意氣なことを言ふとは思つたが、一番嘲弄してやらんものさ。』

『それはお前さんなどの眼から見たら詰らんかも知れんが、僕には矢ッ張り之が詰るんで。』

『何ういふところが詰るの。』

『何ういふところと言つて、口で講釋しても分るまいさ、僕のようになつて見なけりやア。』

『そうか、お前のやうになつて見ればそれが分るかの、ハハハ。』
と冷笑すのやら侮辱するのやら、譯も分らずにいハハハと笑ふのが、少なからず予の
感色を書したので。

『そんならお前さんなどの旅行は詰る旅行ですかえ。』

『そうとも、私等は旅をするにもぼんやり歩いて居るんじやないからなア。』

と、私等はぼんやり歩いて居るのじやないと言へば、暗に予の茫然なるを嘲るがごと
くなるので、この坊主何處まで人を馬鹿にするのかと、早やむらくと疝癪は込み上
げて來た。

『そんなら何んな旅をするのかね、お前さんの旅は。』

『私の旅かえ、たとへばこうやつて山の中を歩いて居ても、人のように景色が好いと
か悪いとかは見て居るのではなく、この山の松の木は何本あるとか、之を伐つて賣
れば如何程になるとか、或はこの山を開墾したら、畑が何町出來て收穫が何れ程あ
るとか始終殖産の途を考へて居るのだからな。』

と眞面目くさつて鹿爪らしく言ふに、その言葉を聞けば如何にも俗僧らしく、と言つ
て之が予を馬鹿にしたのか、さつ張り譯が分らず、この坊主變な坊主だわい、と
つくづくその面を見やれば、彼は悠然として蒼空を眺めて居る、その落ち附いた態
度や、その何處となく洒々として居る所などは、決してたぶの俗僧らしくはない、と
思へば何うやら稍々尊敬の念も出るやうで、尙ほつくづくと仔細に見やれば、その凹
んだ、底に一種の光ある異様の眼に、何となく犯すべからざるごとき威嚴を具へて、
と言つて、その眉の下つた、額に皺のある、口元の愛嬌などは、又聖徳の高い慈悲深
さうな聖にも見えるので、茲に至つては漸く尊敬の念を生じたものゝ、之までお前さ
んと言つた言葉を遽に貴僧と呼ぶわけにも往かず、好し呼び得るごしても予が性情と
してさる二様の言葉を使ふなどのことは出來ないので、矢ッ張りお前さん。

山間幽谷の間を二三里も坊主と話しながら歩いて居たのだが、この時坊主は足を止め

て。

『私は之から別れようといふ。』

『オヤ、お前さんは米澤まで往くと言つたじやないか。』

『なアに私の家は之から往くのだ。』

『そうかえ、米澤はまだ遠いかね。』

『なアにもう直き其處だ。』

『そうかね、そんならお前さんは之から往くかね。』

『そう、私の家は之から折れて一里ばかりも往つた所だ、何うだ、ちよつと寄つて休んで往かないかといふに。』

この坊主中々風變りの坊主に依つて、一番居室を襲ふて驚かしてやらんものかと。往つても差支へはないかね。』

『ア、好いともく、何も遠慮は要らんから、と快よく言ふに、そんならと言ふので

随ひ往けばやがて、小徑を辿つて暫く往けば、山を下りる麓にあつて、三四十戸ばかりの山村がある、坊主はそれを指して。

『私の處はこの村だ、随分汚ないからな、驚いちやアいかんよ。』

『そうかね、』と尙ほも随ひ往けば、早くもその村へ出た。

藁葺家根の小さな汚なさうな家々の前を通つて、村外れの小川の橋を渡つて、又爪先上りの小徑を一町ばかりも往けば、麓のこんもりと茂つた銀杏の樹の側に、高い藁葺家根の寺が見えた。

『此處が私の家だ。』

と坊主は先きに立つて、寺の臺門を潜れば、四邊は奇麗に掃き清めてある、その清らかな臺門を通つて、更らに小さな門を潜れば、其處には箒を手にした六十ばかりの爺さんが、今しも入つて往つた坊主を見るや、恭しく膝に手を突いて、御歸りなさいまし。

「お客様を連れて来たからの。」

と坊主は一言を残して、手を導きつゝ、本堂の側の玄關に腰かけて待つて居る、寺男の爺さん怪んで予を見送りつゝあつたが、今しも玄關に腰を下したのを見て、慌て裏口へ廻つて、やがて間もなく盥に清らかな水を入れて来た。

會釋して足を洗つて、又も坊主の後に随ひつゝ、本堂の側の長廊下を傳つて、一番奥まつた書院に導かれた。

座敷へ入つて四邊を見廻せば、表の廢額して居るにも似ず、室の體裁は甚だ瀟洒として、障子一枚開けば、前は直ぐと廣い庭で、庭のつゞきは山、山は悉く紅いに變じて、落葉は庭の面に埋つて居る、寂寞な、幽邃な、何だか仙郷へでも来たような氣持ちで、心は何となく洵然として、暫し無限の感に打たれて居た。

「何うだの、汚なくて驚ろいたらう。」

「何うも好いところだね。」

「なアに好くはないよ、山の中での。」

「山の中だから好いのさ。」

「山は好きかい。」

「好きだね。」

「何うも偏僻で不自由での。」

「その偏僻で不自由なのが好いので。」

「ハ、ハ、面白いことを言ふの、まア緩り休むが好い。」

と、この坊主中々呑氣らしい氣樂な坊主で、自分は早や足を投げ出して切りに足を揉んで居る。

間もなく最前の爺さんはやつて来て、闕に手を突いて恭しくお辭儀をするに、予も又恭しくお辭儀を返せば、爺さんはやがて茶と菓子とを置いて、彼方に下つた。茶を飲み世間話しながらをして、暫らく休んで居たが、ふと床の間を見れば、經机の

傍らに碁盤がある、さてはこの坊主碁でも打つのかと、そぞろその風流が思ひやられて、以前よりは更らに何だかこの坊主が氣高いやうな奥床じいような。

『お前さん碁を打つのですかと言へば。』
『そうだ、打つがの、近頃は相手がなくつてさッ張りやらんが、お前は打つかの。』
『實は碁と來たら大の得意で、我黨では先づ屈指の打手、人も許せば予も又任じて居るので。』

『少ッとは打つね。』
『そうか、それは面白い、早速一番やらうでないか、』と坊さん甚だ恐悦。

實は予も好きではあり又打ちたいので、この坊主何れ位打ッか試して見て、殊に依つたらあッと驚かしてやらんものと。
『そうだね、一番打つて見ても好いね、』と言へば、坊主は早や自から立つて碁盤を持ち出して來た。

碁盤の前に行儀よく坐つて、さてと蓋を取つたが、坊主先づ口を開いて、初段と何うして打つといふ。

『初段なごうは打つたことがないから分らないね、お前さんは、と言へば、私もそうだといふ。』

『そんなら知らず互ひ先といふから、先づ握つてやらうよ。』
と予石を搦んで出せば、可笑や予が白を持つことになつた。

『ハ、ハ、ハ、白を取られたな。』
と坊主も坐り直して、やがて盤に向つて一目を下した。

予も又念に念を入れ、注意に注意を加へて打ち出した、彼れ一目、予れ一目、一目又一目、稍々石の二十も打ち出せば、畧ぼ坊主の手並も分つた、が、この坊主中々打つぞ、殊によると負けるかも知れんぞ、なごう内心竊かに警戒して居れば、彼方も矢張りそう思つて居るのでもあらう、首を左右にひねつて、輕々しく石を下さない、局は

進み、形勢甚だ複雑に、或は死し或は生き、千變萬化して、漸く局を終れば、難有や予勝つこと二目。

坊主負けても甚だ恐悦がつて、之は好い敵手だ、是非もう一番といふ。

予も尙ほ打ちたいのは山々だが、この時早や餘程時間が経過して、太陽は餘程西に傾いて居るに、餘り遅くなつては大變と。

「僕もまだ打ちたいことは打ちたいが、もう餘程遅いようだから、惜くとも之でお別れにしようと言へば、用があるのかといふ、なアに用なんぞは何時だつてないが、遅くなれば山道が大變だからと言へば、そんなら宿つて往けといふ。」

何うせ急ぐ旅ではなし、何處へ宿つても差支はないのだが、それでも僅か一面識に過ぎない所へ、如何程坊主の家だからとて、餘りづう／＼しくもあるので。

「否、まアそうして居まい。」

「用がなければ宿つて往つても好いだらう、その代り何も御馳走はないが、ちツとも

遠慮は要らんのだから、五日居つても十日居つても。」

「そうかね、そんなら宿つて往くとしようか。」

とづう／＼しく言葉に従へば。

「それで安心した、私もこんな山の中に一人で居るのだから、まことに退屈しての、

お前が恰度好い基敵だから何よりさ、ハ、ハ、ハ。」

宿るとなれば悠然したもので、そんならもう一席といふので、又も盤に向つたが、今

度は黒を持つて六目の負け。

この時もう日が暮れてしまつた、寺男は洋燈を持つて來た、未だ夕飯には少々早いから今一席といふので、又も。

一時間もかゝつて漸く打ち終れば、又も予が白で四目の勝ち。

中々打つとう、とは坊主が感嘆した言葉で。

打ち終れば夕飯の膳が運ばれた、膳には銚子がついて居る、之が何より。

お前は酒を飲むだらうと言ふに、酒がなければ生きて居られないと言へば、そうか、それは益々頼母しいのう、御馳走は何もないが、酒なら如何程でもあるからこのこと。

膳を向ひ合せて飲み初めたが、この坊主も中々に飲みさうな面つき。

山家のことゝて、膳には僅か野菜の二三しかないが、酒は又山家に似合はぬ上酒。

差しては飲み、飲んで差し、献酬早や五六本の徳利を倒したが、坊主も酔はなければ予も又格別酔はず、未だも飲み足りない顔して居れば。

「碁も好い相手だが、酒も好い相手だのう。」と笑つて居る。

又も二三本の徳利は来たが、献酬は面倒なればとて、互に一本づつを引き寄せて、獨酌でぐびりぐ。

語つては飲み、飲んで語り、痛飲壯語すれば、この坊主中々面白く、學もあれば氣

骨もある、意氣頓に投合して。

夜の更けるまで飲み且つ語りして、徳利の殆んど十本も倒したであらう、坊主はもう酔つて居る、予も又少なからず酩酊して。

さらば寝ねて又明日語らんものと、坊主に別れて、寺男の案内で本堂の裏座敷へ通れば、茲には早や床が展べられて、枕元にはぼんやりとした行燈が點いて居る、何だか陰氣さうな室、寺へ宿るなどは生れて之がそも初めて。

枕に就いて耳を澄ませば、二間三間離れて居る坊主の室からは、早や雷のやうな鼾聲が。

予も又酔つて居るので、間もなく前後も知らず。

